?神的神式

百（難しい童話）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
？神的神式

【Ｎコード】
Ｎ７１６５Ｗ

【作者名】
百（難しい童話）

【あらすじ】
人間の精神に働きかけをする機能を持った、ナノマシンによって形成されるネットワーク『ナノネット』。そんなものが自然界にも繁殖をしているという世界設定の話です。今回は、とある島で神になってしまった女と、その近隣の海で発生する怪異。冷凍保管庫で起こった殺人事件。そんな事々にタコ養殖場と宗教とが絡んで話が進みます。色々と書いていますが、本当のテーマは”主客の分化”だったりする、そんなＳＦです。今回の嘘のキャッチコピーは、「神様には内緒でお願いします」です。特に元ネタはありません。こ

のシリーズの６作目です。

0. 神

（端末・新田恵介）

原子や分子、あるいはもっと小さな電子や陽子や中性子といった素粒子の世界、スモール・ワールド。そんな世界を扱う物理に、量子力学という分野がある。

その中で提案されたものに、不確定性原理という原理が存在する。これは、位置を決定すれば運動量が分からなくなり、運動量を決定すれば位置が分からなくなるという実験結果から、そもそも観測をしなければ物事は決定されないのではないか？という、結論に至り、それを“不確定性原理”と名付けたものだ。

因みに、時間とエネルギーにおいても、この関係性は存在している。

もっとも、今は既にもっと基本的な原理からこの不確定性は導かれていて、正確には不確定性“定理”と呼ぶらしい。

この不確定性定理を前提とし、演繹させると奇妙な現象が導かれる。

さて。想像力を働かせてみよう。これは現実に存在していながら、それでも日常生活では感じ取れない（もし、感じ取れるという人がいたら、謝るけど）、とてもワンダーな世界の話だ。把握する為には、想像力と自由な発想力が必要だよ。

電子が複数個ある空間を想像してみよう。その電子の存在はもちろん不確定だ。言うまでもなく、不確定性定理に従っているからだ。位置も運動量も決定されていない。ところが、この世界に変化が起こり始める。高かった温度が下がっていったと思ってくれ。そして、温度が下がると、質量をもったものの運動量は下がってしまう（と言うよりも、そもそも熱自体が運動エネルギーなのだけど）。

ここからが重要だよ。思い浮かべるのは、先の不確定性定理の話。

特に運動量が決定をされると、位置が分からなくなる、という部分だ。これはつまり、位置の不確定性が上昇するという事。

繰り返すけど、温度が下がると、質量を持ったのものの運動量は下がる。電子にも質量は存在するから、電子の運動量は下がる。つまり、運動量が（完全ではないにしろ）決定に近づく、という事だ。そして、運動量が決定をされると、位置がその分、不確定になる。電子の位置の不確定性が増す訳だ。

ぼんやりとした雲のようなものをイメージしてくれるとありがたい。球体の雲がいいかな？　その雲は、電子が存在しているかもしれないゾーンを表現している。運動量が低下すると、その雲が拡がるんだ。ここで忘れてはいけないのが、電子は一つではないという点。複数個存在している。つまり、そんな雲がいっぱいあるのだね。もちろん、それらが近くにあれば、その雲と雲は接し重なる事になる。

さて。すると、どうなるのだろう？　これは言うなれば、電子群の存在可能域が重なってしまっている訳だ。電子と電子が区別できるのなら、またちょっと話が変ってくるのだけど、電子と電子は区別できないとされている。なら、重なってくっついた電子群は存在が区別できない大きな一つの電子の雲となりはしないだろうか？

つまり、電子達は、存在を共有し始めてしまうんだ。そこにあるのは、存在を共有して一つとなった巨大な電子の塊。

こんな電子の塊ならば、少々の電気抵抗なんか無視して直進できそうな気がしないか？　と言うよりも、実際無視して直進してしまうのだけど。この状態になった電子は、電気抵抗０か、または測定できていないほどの小さな値で流れ続け、エネルギーを失わない。

もう、分かる人は分かるかもしれないけど、これが“超電導”と呼ばれる現象、のまぁ、イメージだと思ってくれるとありがたい。正確にこの理解で良いのかどうかは、実は僕自身にもそんなに自信はないのだけど。

それと、実は説明を端折った点もある。電子という素粒子は、マ

イナスとマイナスで互いに反発をし合うから、くっつけるにはまだ条件が足らない。が、申し訳ないけど、ここではその話題には触れない事にしておく。本題とはそんなに関係のある話ではないから。

この超電導を応用したものとして、リニアモーターカーや、または超伝導直流送電という送電ロスなく電気を目的地に送り届ける技術がある。

この現象は素粒子の世界のコーラスだと表現しても構わないと思う。複数の存在が、一つになる現象。

さて。

ここでもう一つ、君の想像力に頼らせてくれ。今までの話を踏まえた上で、人間の群集行動を考えて欲しいんだ。

人間は時に、ここで説明した電子達のように同調し合い、一つに結びつき、そして同じ行動を執る。例えば、暴動。個を集団内に埋没させて、一人の時には考えられないほどに暴れてしまう。もちろん、少々の抵抗なんかじゃ止まらない。

集団で行動する際、人はまるで個人の人格が消えてしまったかのようになる場合があるんだ。一人の時は優しい人が、集団にまざった途端に、仲の良かったあの子を急にいじめ始めるとか、ね。“個人の存在”が不確定になって、“集団”に接する事で溶け混ざってなくなってしまったみたい。

これは多かれ少なかれ、人間社会のいたる所で起きている現象だ。人間社会が人間社会として成立しているのは、この“同調”の性質があるからだとも言えると思う。その代表的なものに“宗教”があるだろう。

これは何も“同じ行動を執る”というような単純なものだけじゃない。抽象概念を共有し、それに従って複数の人間達が行動をしているケースも多々ある。法律や道徳、お金の巡り、その他にも例えば“霊”だとか、そういった概念を共有して。

そういえば、関係があるのかどうかは分からないけど、こんな話

もある。実は今の人類の祖先に直接は結びつかない原始人も、過去には存在していたらしいのだけど、この原始人達は滅びてしまった。そして、この原始人達には“霊に祈る”という能力が存在しなかったと言われている。

もしかしたら、“霊という存在を想定する能力”は、人間が社会を構築する上で非常に重要な役割を果たしているのかもしれない。そしてだからこそ、宗教というものと人間社会は分かち難いのかもしれない。

まぁ、分からないけど。

でも、こんな想像は可能じゃないかと思う。人間達は心の中に、同じ概念を共有する事で、まるで大きな一つの存在のように行動する事ができている。それで、まるで超電導時の電子達のように、存在を共有させている。

この人間の集団行動と超伝導との間にあるアナロジー…　類似性には何かしら偶然以上のものがあるのかもしれない。

こんな事を書くと、「おいおい、人間心理と純粋に物理的な現象とを、同類と考えるなんて乱暴過ぎないか？」と言う人がいるかもしれないけど、僕はそう結論出してしまうのは早計じゃないかとも思う。少なくとも、数学的には、抽象概念としては、一致する何かがあるのかもしれない。

――いや。

これは、全くの想像で、理論だとかそんな事が言えるような代物じゃないのだけど、この“同調”には、もっと深遠な謎が隠されている。そんな可能性を、僕は思わないでもないんだ。

同調すれば、世界を共有する。共有したそれは大きな個で、その個の中にはルールが存在し、その中で世界は作られる。個が存在しなければ、世界は作られず、世界がなければ個は存在しない。

こんな風にも考えてみよう。

もしかしたら、この僕という存在は、無数の存在が何かを共有する事で発生した一つの世界なのかもしれない。

僕がバラバラになれば、僕という世界は崩壊をし、僕はいなくなってしまう。その代わり、一つを共有し維持している限りにおいては、僕は僕自身に自由に内的なルールを課する事ができる。つまり僕はルールを創造している。まるで自然法則のように僕の中にルールを。

その考えを僕の外にも当て嵌めてみよう。僕を支配している社会ルール。それも、実はそんなものなのかもしれない。社会が一つを共有し維持している限りにおいて設定できる、世界の法則。もちろん、それは社会の外の自然法則にだって当て嵌められるかもしれない。

宇宙が一つを共有し維持している事により、発生するルール。それが自然法則。

なんだか、哲学っぽいような宗教っぽいような話になってきたけど、あまり構えないでくれ。これは飽くまで“想像”の範疇の話さ。ただの想像。想像を膨らましているだけ。

さて。

では、もっと、想像をしてみよう。

仮に世界の全部と僕が結びつき、僕の存在がなくなって、“大いなる一つの何か”の一部でしかなくなってしまったら。そしてそれでも、同時に僕の意識があり、そんな存在を感じられたなら、或いは僕はその存在を“神”とそう呼ぶかもしれない。

1．たこを食らう

（無職・大村ゆかり）

わたしは、海岸沿いを歩いていた。夕暮れ時で、気温のピークを過ぎた大気は冷たかった。お蔭で汗が引き、涼しげなそよ風が吹いてわたしの体温を冷ましている。しかも、初夏の雰囲気が磯の匂いと雑じって中々にいい感じを出している。これで、気分が良くならないはずがない。

……と、言いたいところだが、実のところを言えば、わたしは不機嫌だった。と言っても、ここしばらくわたしの機嫌が良かった事など一度もないのだが。

ここは岩盛島という本土からは少し離れた所になる小島だ。交通の便は悪いし、これといって目立った産業もないから、人口は少ない。少し、水産業が盛んなくらいだろうか？　それも、近年は減少傾向にあるのだとか。

何故わたしがこんな辺鄙な所に来ているのかといえば、ここにわたしの親戚の一人が住んでいるからだ。ただし、別に観光目的で遊びに来た訳ではない。純粋に生活の為だ。わたしは先月、職を失ってしまったのだ。このままでは生活ができそうにもないので、生活保護をもらおうと市役所に行くと、家族親戚にまずは頼ってから、それでも駄目なら申請しろと言われた。それでそのままその言葉通りに比較的近くに住んでいて、世話をしてくそうな親戚を当ったのだ。

事情を話すと、その親戚は「へ？」という変な声を上げた。発音的には「え？」と「へ？」の中間辺りだったと思うけど、ニュアンス的には「へ？」な気がするから、まぁ、「へ？」だと思う。違いを説明してくれと言われても困るのだけど。

別に断ってくれても良かったのだが（そうなれば、生活保護を貰

う言い訳ができる）、その親戚はわたしの頼みを聞き入れてくれた。それでわたしは複雑な気持ちになった。感謝半分、面倒臭い半分。

はじめ、親戚はわたしを温かく迎え入れてくれた。もしかしたら、せいぜい二日か三日、長くても一週間くらい滞在しただけで帰るとそう思っていたのかもしれない。わたしは引っ越しの荷物の荷解きもしていなかったし、そう思われても仕方ない。

しかしわたしが、それから一か月経っても出て行かないでダラダラとしていると、態度が変わり始めた。明らかに厄介者を扱うような感じになり始めたのだ。わたしはその態度の変化を感じ取り、イライラし始めた。まぁ、仕事をし始めようとすらしないわたしが悪いのだが、どうにもやる気が出ないのだ。やる気が出ない、と言えば実はまだ荷解きすらしていない。やる気が出ないから。

わたしはきっと、ずぼらなのだろう。好きでずぼらに生まれてきた訳じゃない。だからこれはわたしが悪い訳ではない。きっと遺伝子にそう組み込まれているのだ。他の優秀な人達と違って、だから真面目にきちんとできなくても仕方ないのだ。

わたしは“生まれ”の被害者である。

まだ暑い日中は、外に出るのが辛いので家の中にいる。しかし、こうして夕暮れ時になれば涼しくなるので、わたしは親戚の視線を避ける為に外を歩くのだ。小さな島なので少し歩けば海に着く。それで、わたしはなんとなく海沿いを歩いていたのだ。

わたしは外を歩きながら親戚の連中について考える。事情を話した上で迎え入れたのだから、何もあんな目で見る事もないのに。わたしは直ぐに出て行くなんて一言も言っていない。それに、家事も少しは手伝っているじゃないか。何て酷い連中なのだろう。これなら、初めから断ってくれた方がよほどマシだ。職を失ったのだって、ちゃんと理由があるのだし。わたしは、不当に扱われている。こんな不便な場所で、我慢してやっているのに。

しばらく歩くと、変な“のぼり”を発見した。たこ神さま。そう書かれてある。それを見てわたしはこう思う。そうだ忘れていた。

この場所は不便な上に、異常な場所ですらあったのだ。たこを祀る変な宗教が存在しているのである。しかも、島の半分くらいの人間がそれに入信していて、聞いた話によると年々増えているのだとか。

ふん

とわたしは思う。何て気持ち悪いのだろう？　こんな奴ら、みんな死んでしまえばいいのに。

こんな奴らなら、わたしを理解できなくて当然だ。あの仕事場もそうだった。わたしを少しも理解してくれない。

わたしはそもそも精神的に弱い人間なのだ。だから心が傷つけば、休みも必要だ。それで休暇を取ったに過ぎない。給料はその分、下げられているのだから大きな問題もないはずじゃないか。職場には嫌いな人間だっていた。にも拘らず、わたしは通ってやったのだ。なのにそんなわたしをクビにするなんて。何日間か休んだだけなのに。面倒で、どうにも身体がだるいのだから、休んだって仕方ないじゃないか。

これからわたしは、どうなるのだろう？

身体がだるくなって、それで仕事を休んでしまうわたしは、きっとまともに働き続ける事はできないだろう。

どうにも、生きていくのが嫌になる。

どうして自分の思い通りにならないのだろう？

働きたくない。お金は欲しい。世間には株や何かをやって、働きに出なくても生活できている人もたくさんいる。わたしも、そんな風に暮らせないだろうか？　何も贅沢をするつもりはない。少しの娯楽と毎日の生活があればそれで良いのだ。ささやかな願いじゃないか。働きたくないだけだ。

働かない、と言えば、わたしぐらいの年頃の女は、普通は働かないで結婚をして子供を産んでいるのだろうか？　だがわたしは、そんな事をするつもりは全くない。何故なら、そもそもわたしは、人類が増える事に反対だからだ。もっと人類は減らさなくてはならない。いや、この地球の事を考えるのなら、滅びるべきじゃないか。

人類は地球の邪魔者なのだ。このままでは、地球の生態系は破壊されてしまうだろう。その為には、人類は滅びるべきなのだ。
　そこまでを思った辺りで、わたしは海岸沿いに、小さな岩を見つけるとそこに座り込んだ。そろそろ疲れてきた。かなり歩いたと思う。そしてそれから、煙草がないかとポケットを探った。ライターと煙草の箱はあったが、中身は空だった。そういえば、煙草税が上がって値上がりしたから、買うのを諦めたのだったか。煙草税が上がるのは、健康に悪いからだそうだ。その上がった税が、喫煙者の為に使われるというのなら分かるが、そんな事はなく、何でも福祉の充実の為に使われるのだとか。
　詳しくは知らないが、日本は育児に対する福祉が足らず、その補強が必要だとか騒いでいる人がいた。上がった煙草税は、その為に使われるべきだと。冗談じゃない。何で人類なんか滅びるべきだと思っているこのわたしが、それに協力してお金を払わなくてはならないのだ？
　そういうお金は、わたしのような弱者にこそ使われるべきなのだ。
　ふと、ライラ―を見つめながら、どこかに放火してやろうかという気持ちが生まれた。パッと燃え上がる火が見えたら、気持ちよさそうじゃないか。それで火を点けてみる。もちろん、実際に放火したりはしない。
　カチッ　ッポ
　カチッ　ッポ
　カチッ　ッポ
　何となく、点けては消すを繰り返す。辺りはもうかなり暗くなってきていた。ただし、まだ海は暗黒に染まってはいない。赤く黒くそしてまだ少しだけ青かった。そのうちにわたしは、その中途半端に黒い海に、奇妙な気配があるのを感じた。
　一瞬だけわたしが点けるライターの火の光に照らされてその存在が浮かび上がる。光っている二つの点は目だろうか？
　わたしはそこでハッとなった。何か普通じゃないものがいると思

ったからだ。もしかして、海の中からわたしを見ているのか？
ヒトの頭のようにも思える。丸い。
わたしはそう思うと、恐怖を感じながらもそれに近づいて行った。
そして、わたしが近づくと“それ”はこう話しかけてきたのだ。
『さっきから聞いていれば、随分と自分勝手な事ばかりを言っていたな』
なんだ、これは？
わたしはそう話しかけられて、目を凝らしてそれをよく見てみた。
不思議と驚きはしなかった。
顔のようなものが出ているが、それは人には思えなかった。何とか入道という妖怪がいるが、そういう印象に近い。剥げている。更に辛うじて、水面下にいくつもの触手のようなものが伸びているのが分かった。
これは、たこ…　なのか？
そう思った。
「なんだ、お前は？」
その次にわたしはそう訊いてみた。すると、それはこう答える。
『“たこ”だよ。あんたがさっき、思った通りだ』
たこが喋るか？　と、わたしはそう思いもしたが、実際喋っているのだから、仕方あるまい。それでわたしは、こう言ってみた。
「自分勝手って、なに？」
わたしは自分勝手な事を言っているつもりは微塵もなかったのだ。
するとたこは、呆れた口調でこう返してきた。
『なんだあんた、自分でそれが分からないのか？　何から何まで、ドコからツッコミを入れれば良いのか分からないほど、自分勝手な事を言っていたじゃないか』
わたしはそれを聞いて、ムッとなった。
「具体的に言ってもらわないと分からないわね」
するとたこは、いよいよ呆れたという風にこう説明してきたのだった。なんで、たこなんぞに馬鹿にされなくてはならいのだろう？

『さっき、人類は滅びろとか言っていた癖に、煙草の値上がりに怒っていたろう？　断っておくが、人類が滅びていったら、そもそも煙草なんか存在しないよ。しかも、あんたは働いてない立場なのだろう？　働いていないあんたが、そうして生活できているのは、何より人類のお蔭だよ。他の人達が働いてくれているから、そうしてあんたは働きもせずに生きていけるんだ。

感謝こそすれ、恨むなんて筋違いだ。

それに自分のために金を使え、みたいな事も言っていたが、人類の滅亡をあんたが本気で願っているのだとすれば、あんたは人間社会の敵になるのだろう？　なら、どうして人間社会の為に使う税金を、自分の為に使えなんて主張ができるんだ？』

わたしはそのたこの主張に思い切り歯を食いしばった。なんだ、このたこは？　なんで、こんなに偉そうなんだ？

『もし仮に、あんたが本当に地球の生態系の為に、人類は滅びるべきだと考えているのなら、何故今すぐにでも、無人島で暮らさないんだ？　あんたが人間社会で暮らしているというのは、生態系を破壊し続けているって事だ。それが嫌なら、砂漠にマングローブを植えに行くでも構わないが』

わたしは何か言い返してやろうかとも思ったが、いい理屈は何も思い浮かばなかった。それで、こう怒鳴る！

「煩い！　お前はたこの癖に、なんでそんなに偉そうなんだ！」

するとたこは笑った。

『ふっふっふ』

なんだか、むかつく笑い方だ。

『それは私が、偉いからだよ。何しろ、私は神なのだから』

はぁ？

とわたしはそれを聞いて思う。なんだ、このたこは。おかしくなっているのか？　馬鹿な誇大妄想をしている。いや、おかしくなっているのはわたしかもしれない。そもそも、たこが喋っている時点でおかしいのだ。夕暮れの海岸で、神と名乗る喋るたこに遭遇する

だなんて。
しかし、そこでわたしは、はたと気が付いた。
――そういえば、この島には、たこを神と祀る宗教があったのだ。
それで少し怖くなる。まさか、このたこは本当に神なのか？　たこはわたしの中の怖れ、或いは畏怖を敏感に感じ取ったのか、こう語り始めた。
『そもそも、一人の人間という立場で、人類の滅亡を判断する事自体がおかしい。人間社会に依存しているあんたは、そんな事を判断できる立場にはいないだろう。それが可能なのは、神くらいのものさ。それくらいの立場じゃなければ、人類の存続を語るに値しない』
わたしはその言葉に自分を見透かされたかのような気になって、思わずこう叫んでいた。
「何を思想するのも、何を考えるのも個人の自由のはずだ！　それとも、神である自分でなければ、人類の滅亡を判断できる権利を持たないとでも言うつもり？」
そのわたしの叫びに、たこはまた『ふっふっふ』と笑った。わたしはその笑いにまたむかついた。
『人類の存続を自由に操作、なんてのは無理だが、それでも判断するくらいはできるかもしれないな。何しろ、私はお前のように、人間社会に依存してはいないのだから。人間社会がなくなっても何も困らない。お前にとっては羨ましい立場かもしれないな』
わたしはそれを聞くと、こう尋ねる。
「まさか、あなたはわたしにたこ教に帰依しろとでも言うつもりかしら？　断っておくけど、絶対に入信なんかしないからね」
たこはそれを聞くと、笑った。
『ふっふっふ。そんな事は少しも考えちゃいないさ。それどころか、私はお前に神になってみないか？と誘うつもりでいる』
はぁ？
と、わたしはそれを聞いて思う。神に？　いよいよ、わたしは自

分が信じられなくなった。わたしが神にだって？　誇大妄想を抱いているのは、わたし自身なのかもしれない。しかし、たこはそのタイミングで、わたしの心を見透かしたかのようにこう言った。

『もしも、神になれば、お前の望む暮らしができるぞ。お前は、働かないで暮らし続ける事が可能だ。何しろ、神なのだから』

その時、その言葉に、不覚にもわたしは惹かれてしまった。この何処にも出口がないような暮らしから抜け出せる…　それは、とても魅力的な提案にわたしには響いた。

これが夢であるにしろ、幻であるにしろ、駄目で元々だ。この訳の分からないたこの言葉に乗ってやるのも悪くはないかもしれない。そんな事を思ってしまった。それで、

「どうすればいいの？」

気が付くとわたしは、そうたこに尋ねていた。たこは嬉しそうな声を出しながら、こう答えた。

『簡単だ。私を食らえばいい。ただし、生のままな。その浜辺に、包丁が落ちている。それで私を殺して、食べるんだ』

暗くて分からなかったが、ライターで火を灯して探すと、確かに包丁が落ちているのをわたしは見つけた。

これ…

あまり上等とは言えない刃物だったが、それでもたこを殺すには充分だった。わたしはそれを持つと、裸足になり、海の中へと入っていった。

たこの足が、ゆらゆらと水面下に漂っているのが分かる。想像していたよりも、近づいてみると大きく感じた。大きなたこだ。神と名乗るだけはある。もしも、この足で捕まえられたなら、わたしなんぞはほとんど何も抵抗をできずに殺されてしまうだろう。たこには毒があるとも聞いている。たこがわたしを騙しているのだとしたら、わたしは簡単に殺されてしまう。

だが、たこはわたしを殺そうとはしなかった。そのまま水面から顔を出して、わたしを待っている。

たこの前まで来ると、わたしは包丁を振り上げた。そして、たこの頭に向けて、それを振り下ろす。

ザク

まるで、ゴムか何かに思い切り刃を突き刺したような感触があり、その後でこんな声が響いた。

『よくやった。これで私は、解放される。これからは、お前が神だ！』

意味が分からなかった。その後でわたしは酷く苦労してたこを陸に上げた。家に持ち帰ろうかとも思ったが、既に相当に疲れていて、運ぶ気になれない。それにこのたこを見つかってはまずい気もした。たこ教の信者に、途中で遭遇しないとも限らない。それでわたしは、包丁でたこをぶつ切りにすると、そのままたこを食べ始めたのだ。

たこはとても美味しかった。新鮮で、コリコリとしていて。そして、それでわたしは“神”になったのだった。

?2．未分化な主体と客体

（心理学者・野辺勉）

私の師は、その症状を離人症に分類していた。離人症とは、自己同一性が一定しない症状の事で、過去と今の自分との連続性を把握できないなどの症状をいう。例えば、過去の主張と今の主張が異なっているにもかかわらず、本人はその矛盾を意識していない、間違った事だとは思っていない、というケースなどが当てはまる。

野球部のエースが、合宿中に後輩のルール違反を激しく叱った。しかし、後に他の部員が同じルール違反を犯しても、その時は少しも怒らず、むしろそれくらいの融通は利かせてもいいのでは、というような事を言った。本人は、もちろんこの二つの出来事を記憶している……。

この例のように、記憶に残っていながら、まるで過去の自分の行いを別の人間の行いであるかのように扱い、切り捨てられるのである。そして、その齟齬に苦しむ事もない。

師はこれを前頭葉の未発達によって起こる症状の一つではないかと予想していた。前頭葉は理性を司る部位であるとされ、ここが破壊されると人間は、気分が抑えられず、直ぐに怒ったりと感情のコントロール力を失う。当然、未発達ならば行動にも問題が生じる。

具体的には、行動スキーマの未形成が考えられると師は述べていた。

行動スキーマとは、人間が行動する際の軸となる、概念のようなものである。何らかの状況に直面した時、この行動スキーマに合わせて、人は自分の行動を決定する。そして、この行動スキーマは常に修正され続ける事により洗練されていく。言い換えれば、自分で作り上げなければ、それは形成をされない。もちろん、これは自己同一性にも重要な役割を果たしている。

この行動スキーマが充分に形成されていなければ、人の行動はその時々によって変わってしまうのである。普通、行動スキーマは本人の自己同一性にとって重要なものだから、矛盾が生ずれば、自己が破壊された、或いは否定されたかのような感覚を覚え、人は苦しむものだ。が、そもそも行動スキーマが未形成ならば行動の矛盾に苦しむ事もない。否定されるべき行動スキーマはそこに存在してはいないのだから。

師は、この点は自己の正当性を信じて疑わない性質にも関係するのではないか、と考えているようだった。そもそも否定されるべき自己を持たない人間の世界は、常に正しいのではないかと考えたのだ。お前の考えは間違っている、と指摘してもそもそも“考え”自体がない。これでは否定できない。本人が自己の否定を実感しなければ、後は常に正しい不定型な自己…　いや、これは自己と表現すべきではないのかもしれない、常に正しい“主観”があるだけ。

だからこの症状を呈する人は、他人の助言を受け入れないという事がよくある。自分の世界は常に正しいのだから、他人の声に耳を傾けないのも無理はない。

未発達な子供が、自己の正当性を信じて疑わない事はよくあるから、この考えにも一応は納得ができる。

私には師のこの主張を、否定するつもりはない。しかし、これだけでは不足しているのではないか、とも考えていた。別の側面にも注目をしなければ、説明ができない。

そう言ってみると師は明らかに不快な様子を見せた。そして、私の話をあまり聞こうともしなかった。しかし、師のその行動は、私の主張の正しさを証明していたのだ。師の行動は自分が“行動スキーマの未形成”により執ると主張していた、“他人の声に耳を傾けない行動パターン”と同じなのだ。だが、師は“行動スキーマ”が未発達な人間ではない。ある程度の人望を集める人格者ですらある。そして、にも拘らず、その自己の矛盾に気が付いてはいなかったのだった（少なくとも、表面上はそう見えた）。

私が主張したい、別の方向から見たこの現象の“説明”は、自他の区別がつかない、つまり未分化な主体と客体という要因である。

どこまでが自己で、どこからが他人なのか、普通の人が考えるよりも、この境界線に対する人間の認識は、曖昧なものだ。例えば、自分の所有物にも自己の範囲を広げてしまうような現象がある。明らかに不要な物を捨てられない心象。その一つの要因には、確実にそれを自己の一部として認識しているといった点があるだろう。また、自分の所属する組織にまで自己を広げるケースもある。自分のチームを否定されると怒るのは、それを自己に含めているからだ。特殊なケースには、放火魔のそれがあるかもしれない。放火魔は、自らが放った火が、対象を燃やし尽くす様を見て快感を感じるのだが、そこには“自分が放った火”を、自己と同一視しているという心象があるのではないかと予想できる。

他人の意見を聞き入れるというのは、その人間を客体として認識しそれを受け入れているのである。幼児がわがままを言い、自分の母親に対して癇癪を起すというのは、母親を自己の一部として認識し、何でも自分の思い通りになる対象と思っているからだ。客体と認識できなければ、人はそれを自分の不快を抑えてまで聞き入れる価値のあるものとは思えない。どんな助言であろうと、客体と認めているものからの発言でなければ、人はそれを跳ね除けてしまうのだ。自分と同じ考えならば受け入れるが、それは真の意味で他人の考えを受け入れている事にはならない。

以上を踏まえた上で、先の私の師の行動を例に考えてみよう。師はもちろん、私を下位の存在として認識している。部下の一人である。支配下にいるものだ。そして、支配下にあるものとは支配者にとって自己の一部だ。つまり師にとって私の言葉とは、他人の言葉ではなく（不快な）自分自身の言葉なのだ。だから受け入れようとはしなかった。断っておくがこのような心理は誰にでもある。私に特別師の人格を貶める意図はない。純粋に私の主張を説明するのに適した事例の一つとして挙げただけだ。その点は、勘違いしないで

もらいたい。
主体と客体が分化していく事は、人間の成長、自己形成にも繋がっていく。これは心理学だけでなく、哲学の方面でも主張されている内容かもしれないが、客体を想定する事で、主体と客体の間に境界線が生まれ、そこに自己が浮き彫りとなるのだ。
自分と他人は違う。こう認識する事がとても重要とも言える。
発情中のチンパンジーの雄が、他の雄に見えないようにして、雌に対して求愛行動を執る。という事例があるが、これは他の雄と自分とは違う、と認識できているからこそ執れる行動とも言える。つまり、この雄は主客が分化しているのだ。
当たり前だと思うかもしれないが、人間の小さな子供には、このような認識はできない事が知られている。例えば、このような実験結果がある。
子供たちに色鉛筆のケースを見せる。中に何が入っているか？と尋ねると、「色鉛筆が入っている」とそう答える。しかし、中に入っていたのはお菓子で、子供たちはこの罪のない悪戯に驚いたりするのだが、続いて自分の親にこれを見せたら何が入っていると言うと思うか？と質問すると、「お菓子が入っていると言う」と答えるのだそうだ。
自分は既にお菓子が入っていると知っている。だから、同じ様に自分の親もお菓子が入っていることを知っていると思ってしまう。つまり、自分と親が違う存在であると認識していないのである。
ある程度、成長するとこの傾向は減るらしい。「親は色鉛筆が入っていると思うから、きっとお菓子に驚くだろう」、とそんな答えに変っていくのだという。つまり、主体と客体の区別ができるようになってきているのだ。
主体と客体の区別が明確でない人間は、自分が思っている内容を、他人も同じように思っている、と認識してしまう。もちろん、これは誰にでもある傾向だし、その一時だけはそんな風に思ってしまう事も多々ある。しかし、これが常態となれば話は別だ。限度を超え

れば、何らかの病気であると判断せざるを得ない。
酷いケースでは、自分が思っていただけの内容を、例え他人が知っていたとしても、それに驚かないような事もある。
これは妄想や夢の類で本当にあった出来事ではないのかもしれないが、近頃見つけたネット上に公開されていたある女性の日記で、奇妙な妖怪のようなたこが現れ、そのたこが自分がただ“思っていただけ”の内容を何故か知っていたにもかかわらず、それを不思議とは感じず、そのまま会話をし続けるというものがあった。これなどは、その一例かもしれない。
他にも、私の知っている女性で、そのような症例を示すケースがあった。その女性は子供を産んでおり、一人でその子を育てていたが、自分の子が自分の思い通りにならない事に困惑していたようだった。あの母子が、今どうなっているかを私は知らないのだが、思い出す度に心配になる。
母親の主客の未分化が更なる問題を呼び、状況を悪化させてしまう可能性は多いにあるのだ。

?3．奇妙な男の子

（中学生・三倉夕）

「僕はただの端末に過ぎないよ」

あたしの隣の席の、新田恵介という男の子は、そんな事を言った。端末。なんだそりゃ？と普通は思うだろう。あたしも当然、なんだそりゃ？とそう思った。

新田くんは頭が良くて、いつもテストでいい点を取るものだから、あたしはそれを褒めてみたんだ、するとどんな経緯だったかは忘れたけど、少しの会話のキャッチボールの後でそんな単語が飛び出したのだった。いったい、これはどんな魔球なのだろう？　実を言うのなら、あたしには半分以上、彼の話す内容が理解ができなかった。ただ、彼が自分を卑下しているだろう点だけは理解できたけど。

「僕の成績が良いのは、別に僕が凄いからじゃない。僕の立場になれば、誰でも成績が良くなる。ある意味、卑怯でもあるんだ。と言っても、僕にはそれをどうする事もできないから仕方ないのだけど」

少し寂しそうに彼はそうも言っていた。何の事じゃい？　あたしは何と返せばいいのか分からず、曖昧に頷いておいた。笑って誤魔化しながら。

新田くんと離れた後で、親切な友達がこんな事をあたしに言って来た。

「あなたの事だから、知らないのでしょうけど、新田クンにはあまり話しかけない方がいいのよ？」

あたしは充分に後悔した後だったから、その忠告に納得しつつも、それでもこう返してみた。それは、その友達が新田クンと呼ぶ時の“クン”に妙なニュアンスを感じたからでもあったのかもしれない。少しばかり馬鹿にしているような。

「どうして？　いじめ？」
すると、その友達はやっぱりか、といったような様子でこう答えた。あたしはこういった人間関係方面の事情に疎いのだ。
「違うわよ。新田クンは、あの例の里の宗教に入っているのよ。しかも、何だか重要な存在なんだって。シャーマンっつーの？　実際、不思議なヒトでしょう？　それで、皆怖がって近づこうとはしないの」
「はぁ」
それを聞いてあたしは納得をする。なるほど、この少しばかり新田くんを軽蔑しているような、上から目線で見ているような感じはだからなのか。
里の宗教というのは、あたし達の地域で最近、少しばかり流行っている宗教で、地元の自然の神様を祀っているのだとかなんとか、そういったものらしい。その自然神の眷属には犬という事になっていて、それでその宗教では犬をたくさん飼っている。しかもとてもよく訓練されているらしく、迷子や探し物がある時に彼らを頼ると簡単に見つけ出してくれるのだとか。恐らくは犬の嗅覚で見つけているのだろうという事になっている。
そこの信者は基本的には親切な人達で、秘密主義だとか排他的な傾向はあまりなく、地元の皆とも仲良くやれているのだが、それでも変には思われているようで、避ける人は避けるし、中におおっぴらに嫌う人もいる。ま、ここにもそんな一例があるみたいだけど。
「ふーん。それじゃ、それでなのかしらね？」
少しの間の後で、あたしはそう言ってみた。すると、その友達は不思議そうな声でこう訊き返す。
「それでって何よ？」
「ほら、臭いってほどじゃないけど、新田くんって少しだけ獣臭がするじゃない。犬の臭いだったのかな？って」
それを聞くと、その友達は不思議そうな声を上げる。
「犬の臭い？　そんなのあたしは感じた事がないけど」

なんですと？
それを聞いてあたしは思う。存在感は強くはないが、仄かには漂ってくるのに。まぁ、席が近くのあたしだから、分かったのかもしれない。そう言えば、最近の席替えで隣になるまでは、あたしだってこの臭いの出所が彼だとは気付かなかったのだ。ただ、彼女は犬の臭いそのものに気付いていなかったようだから、少し変だけど。
もしかして、あたしって、何気で鼻が良かったのかな？
と、その後でそう思って、あたしはそれを気にしない事にした。
新田くんの印象は、爽やかでありつつミステリアスな感じがし、背はやや低いけど、それはそれほどのマイナス・ポイントとは思えない。運動神経はきっと並みくらいだろうと思う。そして先にも述べたが、成績は良い。宗教なんて事情がなければ、きっと女の子たちから人気があっただろう。いや、あの宗教に入っている女の子たちからなら、既に彼は人気があるのかもしれない。それで、あたしはこんな事を言ってみたのだ。
「しかし、惜しいわね。そんな事情がなければ、新田くんってそれなりにいい顔立ちなのに」
少しおどけてそう言ってみる。すると、その友達はふざけてか、こう応えた。
「あら？　宗教差別は良くないわ。気に入ったなら、付き合っちゃえば良いじゃない」
「いやー　あたしは、猫派だから。犬も可愛いけどさ。ペットの話で、喧嘩になっちゃうわよ」
「とか何とか言ってるけど、別に飼ってないわよね？　あなた。猫」
「アパート暮らしだからねぇ」
そう言いながら、あたしは腕を組む。ただし、あたしが猫好きなのは本当だ。家の近くの海岸で、猫が集まる場所があるのだけど、そこによく餌をやりに行く。人懐っこいのが中にはいて、触らせてくれる。

「でも、飼えるのだったら、飼いたいのだよ。あのにゃんこどもを触っている時の感覚といったら、至福だからにゃー」
「その語尾、やめれ。むかつく」
「くっ…　あなたなら分かってくれると思ったのに」
その時の会話はそれで終わった。そして新田くんについて、これ以上、深入りするつもりなどあたしにはなかった。その友達の忠告通り、できるだけ関わらないようにするつもりでいたのだ。
なのに。それなのに、あたしはそれから新田くんに関わる事になってしまったのだ。その猫が切っ掛けとなって。

ある日、あたしがいつも通り猫に餌をやりに行くと、そこで少しまずい光景を見かけた。いや、大した事でもないのだけど、猫がタコを食っていたのだ。しかも、生。きっと、死んだタコが流れ着いたものだろう。タコは消化に悪く、あまり大量に食べると腹を壊してしまう。それであたしは、慌てて猫からタコを取り上げるとそれを海に放り投げた。タコは、そのまま海の底に沈んでいって見えなくなる。
猫は「にゃー」と鳴いて、あたしに抗議していたようだが、あたしが餌を取り出して与えると直ぐに忘れて機嫌が良くなった。無心に餌を食べている。あたしはその光景にほんわかとなる。さわりてぇ…
だけど、そんな時に声が聞こえたのだ。
「魚介類…　見なかった？」
あまり大きな声ではなく、あたしはそれが聞き覚えのある声でなければ、きっと無視していただろうと思う。顔を上げると、少し高台となっている場所に、新田くんの姿があって海を見渡していた。
新田くんは大正時代を思わせるような袴姿で、それに薄手のマントのような外套を羽織っていた。もう夏だから、そんなものは必要ない。暑いはずだ。奇妙な恰好にも思えるけど、もしかしたら宗教関係の衣装か何かなのかもしれない。

「どうしたの新田くん？」
あたしがそう尋ねると、新田くんはこう返してきた。
「魚介類…　きっと、海から流れ着いたものだろうと思う。それを小動物が食べていたのじゃないかと思うんだ」
あたしはそれを聞いて、先のタコだろうとそう思った。
「ああ、さっきこの子が、タコを食べていたけど、それの事かな？」
あたしは目で猫を示しながら、そう答える。新田くんは「なるほど」と頷いてから、こう続けた。
「それで、そのタコは今はどこかな？」
あたしはそう言われて、今度は無言のまま指で海を指し示した。
「捨てたの？　海に？」
疑問形のその言葉に、あたしは多少の非難のようなものを感じ取った。それで、こう返したのだ。
「だって、この子が食べちゃうのだもの。タコって猫に毒なのよ？　消化不良を起こしてお腹を壊しちゃうの」
すると新田くんはこう応える。
「別に責めちゃいないよ。でも、困ったな。これで手掛かりがなくなった」
あたしはその言葉の意味が分からず、困惑する。
手掛かりって何の事じゃい？
その時に、猫がにゃーと鳴いた。それで新田くんは猫を見る。それからふっと笑うと「そうか、こいつがそのタコを食べていたのだっけ？」とそう呟くと、「こいつを手掛かりにすればいいのか」と一呼吸の間の後で続け、高台から降りて、猫に近づいていった。
何をする気？と思っていると、そのまま新田くんは猫をあっさり捕まえ抱え上げてしまったのだった。確かにここら辺りの猫は人に慣れているものが多いけど、それでも簡単に捕まるのはおかしい。あたしは何か不自然なものを感じつつ、怒っていた。
簡単に猫にさわれて、ずるい！

……じゃなくて、猫をどうする気なのかと不安になったのだ。新田くんはそのまま猫を連れて行こうとする。また高台に上り、視界から消えかける。

「ちょっと！　その子をどうするつもり？」

あたしはそう叫ぶと、新田くんを追った。海岸沿いの道路に向かう。しかし、そこで固まってしまった。

犬が二匹、あたしを睨みつけながらウーッと唸っていたからだ。

もしかしたら、これが里の宗教の眷属、飼われているという犬なのだろうか？　威嚇さえしていなければ、犬も可愛いのに。

「この人は大丈夫だよ。別に何もしないさ。クラスメートなんだ」

こちらを見ずに新田くんがそう言うと、犬二匹は何も言わずに新田くんに従ってあたしへの警戒を解き、彼の後を追った。まるで言葉が通じているようにすら思える光景。あたしは少し驚きつつも、彼を追った。猫を見捨てられない。

新田くんは別にあたしを振り払おうとも、付いて来るなとも言わず、ずんずんと進んだ。あたしはその後ろ姿に向けて、「ちょっと。その子をどうするつもりよ？」と、ずっと言い続けたのだけど、新田くんは「別に危害を加えはしないよ」と振り返りもせずに答えるだけで具体的には何も説明してくれなかった。一定の距離を保ちながら、彼の後をそのまま追うと、なんだか林のような場所に辿り着いた。彼は更に進む。

流石に少し躊躇したけど、それでも勇気を振り絞ってその中に入ると、一軒の家が目の前に現れた。

木々に囲まれた中に、ひっそりと佇んでいる。表札を見ると、“新田”と書かれてあった。どうやら、新田くんの家らしい。あたしは意を決すると、呼び鈴を鳴らした。先の二匹の犬が現れたらどうしよう？と思ったけど、そんな事はなく、インターホンから声が聞こえた。

「どうしたの？」

新田くんの声。

「どうしたのじゃないでしょう？　あの猫はどうしたのよ？」
「だから、危害は加えないよ。ちょっと調べさせてもらっているだけだ」
「信じられない。さっきの犬達に襲わせたりしているのじゃないでしょうね？」
あたしは犬も好きだけど、基本的には猫派なのだ。味方をするなら猫の方。それを聞くと新田くんはやれやれといった感じの声でこう返してきた。
「そんなに信用できないなら、中に入って一緒に見ている？」
そう声が響くと、玄関のドアが開いた。新田くんの姿が見える。手招きをしている。あたしは、さっきの犬が出てきやしないかとビクビクしながら進んだ。ここまで来たら、引き下がれない。
新田くんの家の中の光景にあたしは少し驚いた。思ったよりもとても綺麗だったのだ。いや、綺麗とかそう言うのじゃない。ほとんど、何もなかったのだ。そんなに大きな家ではなくて、必要最低限の家具調度の類が置いてある他は何もない。絵も何も飾ってない。実を言うなら、あたしは先の犬を家の中で飼っているものと思っていたのだ。外に見えなかったから。荒れた光景を想像していた。これはこれで、狂気的な光景と言えなくもないけど、方向性が違っている。
足を踏み入れる。床には埃ひとつ落ちていない。夏なのに冷たい印象がある。奥に案内されると、そこにさっきの猫がいた。
「さっきの犬はどうしたの？」とあたしが尋ねると、新田くんはこう答えた。
「あいつらは林の中だよ。ここには用がある時しか来ない。近所の人達に警戒されるのが嫌で、僕がそう命じているんだ」
噂通りによく訓練されている。それを聞いてあたしはそう思った。そしてそれから気が付いたのだ。自分がたった一人で、男の子の家に入っているという事実に。あたしはそれで緊張感を覚えた。
「家の人はいないの？」

その所為で、つい、そんな質問をしてしまった。すると新田くんは淡々とこう説明してきた。

「父親は僕が物心ついた頃からいない。お母さんは、僕が小学校高学年の頃に死んだ。教団の人が世話をしてくれているけど、基本的には僕一人でここに住んでいる」

え？とあたしは思う。新田くんにそんな不幸な生い立ちがあるとは思わなかった。もしかしたら、新田くんが宗教に入っている事とその話は関係があるのだろうか？　そう疑問に思う。だけどもちろん、あたしにはそれ以上を聞くことはできなかった。

新田くんはそれから猫に手をかざす。何をやっているのか分からなかったけど、単なる宗教の儀式とかではない気がした。猫が起きているにもかかわらず、大人しくその場にいたからだ。普通なら、知らない場所に連れてこられたら、落ち着きなく歩き回っているはずだ。猫の習性からいって。

「何をしているの？」

堪らずあたしはそう尋ねた。すると、新田くんはその問いには答えず、こう訊き返してきた。

「ねぇ　ナノマシン・ネットワークって知っている？」

「ナノマシン・ネットワーク？」

「そう。ナノマシンによって形成されるネットワーク。そのネットワークは、時に人格のようなものをそこに発生させる。そして理解し考え、人や動物に働きかけをしてくる事さえある。場合によっては、操ったりね」

何を言っているのだろう？　あたしはその新田くんの言葉に不安になる。

「そのネットワークは、実は自然界にも繁殖をしている。生き残る為に様々な戦略を立てる。人間社会を利用する場合だってある。例えば、宗教の衣を借りたりね。そして、ナノネット同士で争いをする場合だってあるんだ」

あたしは少し恐ろしくなってこう言ってみた。

「もしかして、新田くんは自分はそうだと言っているの？　そのナノネットに利用されていると」
新田くんはその問いには答えない。代わりにこう続けた。
「ナノネットは、人体や他の生物の体内で繁殖する事も可能だ。そして様々な種類がある。人格を乗っ取るような能力のあるのもいるようだけど、それができないのもいる。そういう奴らは、人間社会を利用する為に人と契約をするのさ。互いの利益になるように。例えば、生活を保障する代わりに、ナノネットの為に働かせるとかね」
まさか、とあたしはその説明を聞いて思う。自分は“端末”だ。確か、新田くんはそんなような事を言っていた。
「小学生の頃、僕は里神のナノネットと契約を結んだ。生活を保障してもらう代わりに、里神に仕える“端末”の一つになると。それ以来、僕はナノマシンを体内に取り入れ、里神の家来になった。僕の成績が良いのはその為さ。寝ている間とかに、何もしなくても様々な情報が頭の中に送られ、インプットされるんだ。ナノネットを通してね。それで何も努力をしなくても、僕の成績は上がっていく。様々な知識や考え方を強制的に学習させられているからだ。どんな副作用があるかは分からないけど」
あたしは息を飲むと、こう言った。
「そんな事をあたしに話してしまっていいの？」
すると新田くんは笑った。
「君が誰にも言わなければ大丈夫だよ。もっとも、僕の生活を破綻させたいのなら、誰かにこの話をすると良い。僕はそれを恨みはしないよ」
そのセリフは、あたしを脅しているようで少し違っていた。まるで、自棄になっているように感じる。自虐的と言うか。
「その猫には、何をやっているの？　どうして、あのタコを探していたの？」
少し笑うと新田くんはこう言った。

「“侵入者”があると里神から連絡を受けてね。どうも他の地域のナノネットが侵入をして来たらしい。伝わってくる情報は確かじゃなくて、海、恐らくは生物の何かを通してやって来たとしか分からなかった。それであの辺りを探していたんだ。どうやらタコだったらしいけど、君がそれを海の底に沈めてしまったから調査ができなくなった。それで、代わりにそのタコを食っていたこの猫を調べているんだよ。

先のタコを食べているこの猫の体内には、既にナノマシンが侵入しているから、それを通して大人しくさせた。完全に乗っ取る事はできなくても、これくらいの働きかけならできるんだ。まぁ、それはあの犬達を操っている点からも分かるかもしれないけど」

しばらく後、かざしていた手を元に戻して新田くんは言った。

「大体は、分かった。これは、何処かの島だな。文字が見える。たこ神。たこの神か」

それから猫は「にゃー」と鳴いて、自由に歩き始めた。

4．神と霊

（怪談ルポライター・山中理恵）

「蛸の神様？」

と、その時私は声を上げました。それはよくお世話になっている女編集記者の鈴谷さんからの奇妙な質問に対して思わず発してしまった言葉で、それを聞くと彼女は「そう、蛸の神様」とそう返してきます。

その質問の内容はこんなものでした。

蛸の神様や、妖怪というのはいるものなのか？

確かに奇妙な質問ですが、実を言えば、私が受ける質問はほとんど奇妙なものばかりなので、それほど珍しい事でもないのです。私は少しの間の後にこう答えました。

「妖怪なら、蛸入道とか、衣蛸とかがいるし、蛸を祀っている神社とかもあるからそんなに珍しくもないわよ。蛸薬師とか。それほどメジャーではないにしろ、ない訳じゃないって感じかしらね」

どちらかと言えば、同僚と言うよりも彼女は私の上司に当たる存在で、本来ならば敬語で話すところなのでしょうが、気心の知れた間柄で、私は彼女とはリラックスして話せるのです。それを聞くと彼女は興味深そうに頷いてからこう言いました。

「なるほど。それじゃ、蛸を神として祀る宗教があってもそんなに珍しくもない訳か」

私はそれを聞いて少しばかり驚きます。

「なにそれ？」

と、それでそう問いかける。すると、鈴谷さんは少しだけ嬉しそうな顔になってこう言いました。

「あら？　知らないの？　妖怪関係情報通のあなたらしくもない。

実は新興宗教にそういうのがあるのよ。たこ神教。これがちょっと変わってて さ」

「新興宗教は興味の対象外なのよね」

と、言い訳交じりにそう返すと、「知らない事が少しくらいあっても恥ずかしがる必要はないわよ」と彼女は言い、それからこう話を繋げてきました。

「この宗教の教義が変ってて さ。何でも人間の生殖行動… いや、ちょっと違うのかな？ 子供を産み育てる事を禁忌としているのだって。人間はこれ以上増えてはいけない種だから、とかそんな理由で。

ねぇ、こんな宗教、他に聞いた事がある？ 性を穢れたものとして扱うってのはあるけど、子供の誕生を否定するのはないのじゃない？ そういう意味で、性を完全に否定したりはしないと思うのよね、宗教は。ところが、この宗教ではそれを否定している」

それを聞くと、私はこう返します。名誉挽回とばかりに。

「古代パレスチナのエッセネ派や、アメリカのシェーカー信者なんかは完全に性を否定しているわよ。もちろん、滅びゆく運命にあるのだけど。私が知らないだけで他にもあるのかもしれない」

ですが、鈴谷さんの反応は素っ気ないものでした。

「へぇ、そうなの？ でも、かなり珍しいのは事実なのでしょう？」

「まぁ、そりゃね。そもそも性行為を完全に否定したら、子供ができないのだから、必然的に滅びるもの。今まで生き残っているって事は何らかの形で、性行為を認めているってなるわよ」

やや憮然として私がそう返すと、彼女はこう言いました。

「でしょう？ ならさ、このたこ神教はそういう意味で貴重なサンプルって事にならない？ 滅びる前に、どんな実態なのか調査するってのは面白いかも。

完全に性を禁忌として、人間は果たしてどんな状態で生活を送るのか？」

流石にそうまで言われれば、彼女の意図に気が付かないはずがありません。ため息を漏らすと私はこう言いました。

「つまり、私にそのたこ神教とやらを取材しろって言っているの？　それって、怪談ルポライターの範疇を超えてない？」

そう私が言うと、鈴谷さんはニコニコと笑いながらこう言いました。

「でも、できるでしょう？　あなたには、そういう方面の知識もあるし」

その彼女の表情を見て、私はまたため息を漏らしました。なんとなく、断りきれないだろう事を予感したからです。ですが、それでも私は半分は愚痴のような、無駄な抵抗のような言葉を苦し紛れにこう返しました。

「私って、日本的な素朴な神様は好きなのだけど、一神教的絶対神な神様は、あまり好きじゃないのよね」

「あら？　でも、これって一応、日本の神様でしょう？　新参者だけど。それに、蛸は昔から神様として祀られていたって、あなた自身が言ったのよ」

「でも、その神様は人類を滅ぼすとか言っているのでしょう？　少し壮大過ぎるわよ。日本の神様とは性質が違うわ。それに、日本の素朴な神様で、性を否定するなんて考えられないし。日本の民俗は、性に対して寛容っていうのがその性質と言ってもいいくらい。むしろ奨励しているのよ。

霊々と書いて、“カミガミ”と読む。私が好きなのそのニュアンスの神様なの」

その私の主張を聞くと、鈴谷さんは「あら、山中さんがそんな大胆な発言をするなんて珍しいわね」と、そんな風に言ってきました。誤魔化しているのです。それが誤魔化しだと分かっていても、私にはどうする事もできないのですが。

予想通り、結局は断りきれず、私はそのたこ神教とやらの取材を

する事になりました。普段、仕事を回してもらっているので、彼女には強くも出られません。そこはやはり上司の立場の人間なのです。さて。取材をするとなると、下調べが必要となります。それで私は、怪異ネットワークを利用して、たこ神教あるいはその周辺の情報を集めてみる事にしました。怪異ネットワークというのは、妖怪だとか怪談だとか都市伝説だとか、そういうのが好きな人の集まりで形成された人間のネットワークです。もちろん、インターネットを利用しているのですが。怪異関係で知りたい情報は、ここに質問を流せば、大体は集まってきます。そして、それで私は少し奇妙な事実を拾ってしまったのでした。

直接、たこ神教が絡んでいる訳じゃない。けれど、何か気になる話が散らばっている。鈴谷さんも独自のサイトを持っていて、ネット上で情報収集はしていますが、直接関係があった訳ではないので、気が付かなかったのでしょう。

まず、目下のたこ神教は、岩盛島という島で信仰されているらしいのですが、この島に近い本州側の海岸沿いで、蛸に関する怪異の体験例が多数報告されているのです。例えば、複数匹の蛸が泳いでいて人を狙っていたというものや、蛸が話しかけてきた、というようなもの、或いは蛸に憑かれてしまった、というようなものまで。まだ、それほど大きな騒ぎになっている訳ではありませんし、誇張されてもいるのでしょうが、それを考慮に入れても捨ておけません。何故なら、岩盛島ではなんと、『蛸の養殖』が行われていて、しかも最近になって成功し、既に事業化しているというのです。

たこ神教が信仰される島で、蛸の養殖が行われていて、その島自体ではなく、その周辺で蛸に関する怪異が報告されている。これでは、関連を疑うなという方が無理です。実際、ネット上でも少しは噂になっていて、養殖された蛸が逃げ出しているのでは？などと書き込んでいる人がいました。

蛸の養殖は、あまり聞いた事がありません。コストがかかるし、水産資源の枯渇が心配されている今でも遠い海からの大量の蛸の輸

入は行われているので採算性が合わず、蛸の養殖は研究すらもあまり進んでいないのだそうです。

いえ、いなかった、と表現するべきかもしれません。ここにこうして成功例があるのですから。コストを抑えた上での養殖に成功している。ただし、怪しい点もあるのですが。

技術的な部分はほとんどが企業秘密という理由で公開されておらず、しかも蛸を群れで生活させ生育している、という噂がある。確か、蛸は群れる性質を持っていないはずですから、これは奇妙なのです。海底に隠れて獲物を狙うという生態なので、“群れる”という行動は適さないからです。品種改良を行ったのではないか？というような推測が載っていましたが、品種改良でそんな事が可能なのかどうか、私は知りません。それで私は、こんな推測を立てたのです。蛸の養殖には、ナノマシン・ネットワークを活用しているのではないだろうか？

つまり、蛸と蛸をナノネットを介して連携させ、集団での養殖を可能にしている。コストを抑えられているのは、だから。

これならば、本州の海岸沿いで蛸に関する怪異が報告されている点にも納得がいきます。岩盛島の養殖場では何らかの手段で、蛸ナノネットは抑えられています。しかし、そこから逃げ出した蛸ナノネットは、制御が効きません。それで、遠く離れた本州では制御不能となり暴れている。もっとも、何か事件に発展した例はまだないようですが。

しかし、そう結論付けてから、私は考え直しました。いや、それが蛸ナノネットによるものと分かっていないだけで、実は既に何かしら事件が起こっているのかもしれない、とそう思ったのです。

そう多少不安になった私は、たこ神関連でも蛸の怪異関係でもなく、純粋にこの蛸の養殖事業を調べてみました。何か変な出来事が起きていないか…

蛸の養殖を行っているのは、“海に千年”という水産食品を扱う食品会社で、自らスーパーも経営しているそうです。養殖蛸は、こ

の会社の目玉商品の一つで、いわゆるプライベート・ブランドというヤツです。蛸の養殖を担当しているのは、この会社の蛸養殖部門ですが、この部門は元々は若者達が始めたベンチャー企業“噂のタコツボ達”を買収したもので、蛸の養殖技術もその会社が開発したのだとか。

そのベンチャー企業が怪しい。と思ったのですが、ネット上で調べられるのは、ここまでが限界でした。もしも、このベンチャー企業の従業員に、ナノマシン技術者、またはナノネット技術者がいたら、今回の事件の背後にナノネットが存在している可能性は大きくなります。

因みに、たこ神教はこのベンチャー企業が創業される数年前から存在していて、元々は無認可の非公式宗教団体、というよりも民間信仰に近いものだったから、どれくらいの時期に発祥したのかは不明だそうです。

この企業関係で何か怪しい事が起きていないかと探ってみると、これが出てきました。数は少ないですが、大きいのが二つ。一つはＣＡＳ冷凍保管庫という、蛸を長期間冷凍保存しておく為の保管庫で、三人の殺人事件が起きたというもの。未だに犯人が分からず、調査中との事です。時間はそんなに経っていなくて、一週間ほど前に起こっていました。そして、もう一つが岩盛島での行方不明事件。蛸養殖を取材中の経済雑誌の記者に連絡が取れなくなり、既に四日間が経過しているとの事です。これを知った時、“ちょっとぉ、鈴谷さん”と、私は心の中で呟きました。恐らくは知らなかったのでしょうが、危うくこんな事件が起きている島に何の心の準備もしないで行くところでした。あまり深入りはしない方が良さそうです。特に、蛸養殖の方には。

それらの情報を集め終えた後で、私は紺野さんに相談してみようかと迷いました。いかにもナノネットが絡んでいそうな匂いがしましたから。

あ、紺野さん…　紺野先生というのは、紺野秀明という名前のナ

ノマシン・ネットワークの研究者で、とても頼りになる人です。ナノネット関連で問題が起こったら、この人に相談すればほぼ間違いない、というくらいの。しかも、人柄も柔らかくてとても話し易いのです。

ただ、結局私は相談は控えようと思いました。私が相談すれば、恐らく紺野さんは真摯に対応してくれるとは思いますが、ですが、だからこそ安易に相談もできないのです。何故ならこの人はとても多忙だからです。私の相談は、きっと重い負担になるでしょう。もしも空振りだったら、大変な迷惑をかけてしまう。相談するのはナノネットが絡んでいるという、もっと決定的な証拠を掴んだ後にするべきです。

ですが私は、その代わりと言ってはナンですが、探偵をやっている藤井さんという人に電話で連絡を取りました。この人は、紺野さん絡みの知り合いで、探偵というだけあって調べ物の能力には優れています。藤井さんは珍しく私が電話をかけたことに多少は驚いていましたが、私が調べて欲しい事があると告げると少し不安そうな声で「まさか、ナノネット関係じゃないでしょうね？」と、尋ねてきました。

「ご心配なさらず。関係があるかどうかは不明ですが、いずれにしろ、調査の内容には影響がありませんから」

藤井さんは、紺野さんとのコネを利用してナノネット絡みの事件を解決してからというもの、そういった依頼を多く受けるようになってしまって、多少ナノネット関係の事件に恐怖しているというか、うんざりしているようなのです。

「どんな調査です？」

少し声を明るくしてそう訊いてきた藤井さんに、私はこう答えました。

「“海に千年”という食品会社があるのですが、この会社の蛸養殖場部門の初期メンバーにナノマシン関連の何かを学んでいた人がいないかを調べて欲しいのです。この蛸養殖場は、元は別企業で、

若者が興したベンチャー企業です。だから大学が、ナノネット関連だったとかあるかもしれない。

あ、もちろん、調査費は払いますよ。取材の経費で落ちると思いますし」

私がそう言うと藤井さんは、「なるほど、なんとなく察しましたよ」と言って少し笑います。それから、ちょっとおどけた感じで、続けてこう尋ねてきました。

「あなたにはそれなりにお世話になっているし、サービスしておきます。どれくらいの期間で調べましょうか？」

私は「できるだけ早くお願いします」と、そう答えます。それを聞くと藤井さんは、「私も人の事は言えないが、あなたも厄介な事に首を突っ込んでしまう性質ですね」と、笑いながらそう言って電話を切りました。

まぁ、こういう話は好きですからね。

電話が切れてから、私は心の中で、それにそう返しました。そして、この取材を少し楽しみ始めている自分にその時気が付いたのです。

?5．冷凍保管庫殺人事件

（特別調査員・二村幸治）

目の前では社長が苛ついていた。社長はどっかの漫画か何かにでも出てきそうな、ガマによく似た造形をした中年で、センスのないあだ名をあえて付けて、俺は心の中でガマウシと呼んでいた。そのガマウシが俺を睨みつけながら言う。

「殺人事件だぞ？　いったい、どうなっているんだ？」

そんな事、俺に訊かれても困る。

と、内心では思いながらも俺は必死に演技をして真剣な振りをしつつ、「まったく、困った事態で」と、そう答えた。本当は全くやる　気がない。いい加減、座りたかったが、ガマウシ社長がずっと落ち着きなく歩き回っているものだから、座る訳にもいかずずっと立っていた。

「あの養殖タコは、うちの主力商品なんだ！　こんな事で頓挫して堪るか！　全く、意味が分からん！」

また、ガマウシが怒鳴った。パワフルな親父だ。よく体力がもつ。まぁ、怒る気持ちは分からないでもないが。軌道に乗り始めたと思っていた商品に妙な風聞が流れ、しかもそんな中で、その商品の冷凍保管庫で殺人事件まで起こってしまったのだから。だが、社長の怒りが治まらない原因はそれだけじゃないだろう。恐らくは、隣にいるこの男も原因の一つになっている。ガマウシ社長は俺が連れてきた、この神原とかいう男が気に食わないのだ。いや、気に食わないとも少し違うか。きっと、苦手なのだと思う。

「まぁ、そう怒らないで。怒っても問題は解決しませんよ」

神原とかいうこの男は、にこにこと笑いながらそんな事を言った。イヤな男だ。と、俺はそう思う。どこに本心があるのか分からない態度をしている。掴みどころがない。職業は人気のないカウンセラ

ーなのだそうだが、その割には妙に偉そうだ。自然体で、相手を見下ろしているような。そう言えば、何故かこの男だけはずっと座っている。客のようなものだから、当然なのかもしれないが、だとしたって、雇われている立場なのだから、少しはわきまえてもらってもいい気がする。

いや、そもそもどうしてナノネットの調査にカウンセラーがやって来るのか、そこから分からないのだ。自分で連れてきておいて、あれなのだが。

ガマウシ社長がまた怒鳴った。

「そもそも、なんだ？　そのナノマシンなんとかとやらは、あいつらを買収してやった時は、そんな事は少しも言っていなかったぞ？」

あいつらというのは、うちの会社“海に千年”のタコ養殖部門の連中の事だ。ベンチャー企業を立ち上げ、タコ養殖の技術開発にだけはなんとか成功したが、事業として成立する見通しが立たず、うちの会社に技術を売り込み、そのままタコ養殖部門として買収された連中。そしてそのタコ養殖に、どうやらナノマシンが使われていたようなのだ。その所為で、本来営業の仕事をしていた俺が、過去、ナノマシンを勉強していた事があるというだけで、調査員として駆り出されたのだが。全く、いい迷惑だ。そもそも俺がナノマシン関連の仕事に就かず、営業になったのはナノマシンが肌に合わなかったからなのに。

このところ、タコ養殖に関わる事で妙な噂話が飛び交うようになった。近くの海を、人を狙うようにたくさんのタコが泳いでいただとか、そのタコが話しかけてくるだとか、タコの霊が取りついただとか。普通なら、馬鹿話で終わりそうなものだが、そのタイミングで殺人事件が起きてしまい、完全には無視もできなくなった。そのタコを冷凍保管しているＣＡＳ冷凍保管庫で、死人が出たのだ。しかも三人も。更にその過程で発覚した事実なのだが、その冷凍保管庫では、必ずタコに対するナノマシンの駆除処理が行われていた。

つまり、タコにナノマシンが入っているだろう事をこれは物語っている。しかも、連中はそれを知っていた。

タコの養殖から、冷凍保管をするまでの過程は、完全にタコ養殖部門の管理下で、うちの上層部はその事実を全く把握していなかったらしい。それで、青くなったのだ。まだ警察にはこの事実を伝えていないのだが、下手すれば関係があるのかもしれない。なにしろ、ナノマシン・ネットワークというのは、人や動物の精神に影響を与え、時には意識を乗っ取る事すらもあるのだ。それはタコ養殖に関わる怪談のような噂とも符合する。もし、これが事件の直接の原因だとするのなら、うちの会社は大打撃を受けてしまう。それで、タコ養殖部門には秘密のまま、まずは調査が行われる事になったのだが（タコ養殖部門に調査している事実を伝えれば、証拠を隠される可能性があるからだ）、外部に漏らす訳にはいかない。内部で調査して、穏便に済ませたい。その調査には少しでもナノマシンの知識がある者が適任、という訳で俺に白羽の矢が立ったのだ。食品会社で、ナノマシンの知識を持つ奴なんて滅多にいない。

だが、真面目にナノマシンを勉強した事なんかないこの俺に、真っ当な調査ができるはずがない。俺は考えた末、裏の人材を雇わせてくれ、と上司に願い出て、なんとか認めてもらったのだ。そして、探り当てた人物が、この神原徹とかいうカウンセラーだ。初めは、ナノネット関連の事件を扱うと評判の藤井とかいう探偵に頼もうと思っていたのだが、この探偵には紺野秀明というナノネット研究者を通して警察に繋がりがあると聞いてパスした。しかし、その代わり、その周辺から融通が利いて、ナノネット関連の相談もできるという、神原というこの男が釣れたのだ。何故か職業はカウンセラーだった。その点が、本当によく分からない。そして今、調査を行う俺と神原の二人は、社長室に呼び出され社長の前にいるのだ。他の人間がいないのは、恐らく逃げているのだろう。誰も社長の愚痴や怒鳴り声なんか聞きたくない。やがて、いつまでも愚痴を言うばかりで少しも話を前に進めようとしないガマウシ社長に痺れを切らせ

たのか、或いは、その様子を見かねたのか、神原は不意にこんな事を言った。
「不安になる気持ちは分かりますが、少し落ち着いてください。私には、今直面している問題が、致命的とは思えません。むしろ充分に乗り越えられる範疇だと思っている」
言葉遣いは丁寧だが、それでいて迎合してはいない。そんな喋り方だ。ガマウシはその言葉に過敏に反応した。
「致命的ではないだと？　事はタコ一品だけの問題ではないのだぞ！　もし、世間にばれればわが社全体のイメージは大きく傷つき、どれだけの損失を被るか…」
それを聞くと神原は笑った。
「ばれなければ良いのでしょう？　もちろん、風聞の一つや二つは流れるかもしれませんが、そういった類のデマは、大きな会社なら何処にでもあります。目立ちはしません。むしろステータスくらいに考えておいた方がいい」
デマ。
神原はそう言った。俺は心の中でツッコミを入れる。デマじゃないだろう、これは。……が、世間でデマかそうでないかの区別がつかなければ、同じなのだが。
「警察がナノマシンの事実に気が付けば誤魔化しはきかん！」
ガマウシは次にそう怒鳴った。が、神原はそれに動じなかった。余裕の表情で、こう返す。
「警察は、ナノネット関連では動きませんよ。というか、動けないのです」
それを聞いて、初めてガマウシ社長の表情が緩んだ。
「何故だ？」
「簡単です。日本の法律では、自然界に繁殖し人間の精神に影響を与えるナノネットの存在を認めていないからです。
存在しないものを、取り締まるなんてできないでしょう？　ま、実は非公式には活用しているのですがね」

それを聞くとガマウシは少し黙った。そして、ゆっくりと「本当か？」と、そう神原に問いかける。その間、“どうか俺に話を振らないでくれ”と、俺は心の中で願っていた。正直、そんな方面の知識はない。

「本当です。世間では、ナノネットが自然界に繁殖している事までは認めていても、それが人間の精神に影響を与えるとなると、眉唾と捉える向きがある。ＵＭＡや幽霊と同類の扱いですね。もちろん、法律的にも認められてはいません。何故なのかは分かりませんが、一説には、ナノネットを自然界に繁殖させてしまった、医療機関などを保護しているのではないか、とも言われています。

ま、どんな理由であるにしろ、法律的に認められていないのは事実です。こちらはそれを有効に活用させてもらいましょう」

言い終えると、神原は何か妙な笑顔を浮かべる。その笑顔が気に入らなかった、というのでもないのだが、それを聞いて、俺は疑問の声を上げた。

「ですが、それは自然界に繁殖をしているナノマシンについてでしょう？　意図的に養殖目的で活用していた、となると話が違ってくるのではないですか？」

その俺の発言に、ガマウシは機嫌の悪い目を見せた。が、何も言わず神原を見る。神原は“面白い”とでも語っているような笑みを浮かべると、少し冷たい目つきで俺を見、それからこう言った。

「何も馬鹿正直に、ナノネットを意図的に活用していたなどと告げる必要はないでしょう？　ナノネットの除去を行っていたのは、念のため、自然界で繁殖しているケースもあるという話を聞いていたので、とでも言い訳をしておけばいい。

こちらの上層部が受け取っているタコ養殖部門の報告書にも、ナノネットは全く触れられていないのだし、充分に通用する言い訳だと思いますよ」

俺はそれを聞いて、「なるほど」と声を上げた。

「それに、あながちそれは嘘だとも言えないかもしれない。どこ

まで、ナノネットの存在と影響とをタコ養殖部門が意識していたかは分かりませんから」
神原の説明が終わると、ガマウシ社長はようやく落ち着きを取り戻したようだった。安心したのだろう。気の弱い男だと、俺はそれを見てそう思う。
「すると、問題は週刊誌やなんかの雑誌方面だな」
ガマウシ社長がそう言うと、神原は「そうでしょうね。しかし、それも時が流れれば騒がれなくなる。飽きるのが早いですから、消費者というものは」と答えた。
俄然、ガマウシは元気になり始める。少し感情の起伏が激し過ぎないか？　と、俺はそう思った。躁の傾向があるのかもしれない。
「ガハハハ！　つまり、大きな問題はないという事か！」
が、ガマウシがそう言うと、神原は首を横に振った。俺はそれを見て、こいつはただの太鼓持ちでもないのか、とそんな感想を持つ。
「いやいやいや。社長、最大の問題が残っていますよ。仮にナノネットが原因だとすれば、どうしてそんな事が起こったのかを解明して、その原因を断たなければならない。これからは二度と起こらないように、です。それが一番の問題だ」
だが、神原はそうガマウシの言葉を否定しながらも、態度では余裕を崩さなかった。そのお蔭でか、不安を煽られガマウシ社長が再び乱れる事はなかった。それを見て、“なるほど、この男はカウンセラーなのだな”と、俺は初めてそう思った。これが計算した上での行動だとすれば、だが。
「自信はあるのか？」
ガマウシがそう声を発すると、神原は余裕の表情でこう答えた。
「自信とまでは言いませんが、少なくともできる可能性があるとは思っていますよ。今のところ、タコ養殖場がある岩盛島ではナノネットが関係していると思われる事件や事故が起こっていません。つまり、タコ養殖場ではナノネットの制御ができている、と考えられる。ならば、離れた場所でもそれは可能でしょう。それを調べれ

ばいいのです」
その回答にガマウシは満足そうに頷く。
「なるほどな。話は分かった」
しかし、神原の話は続く。
「今のところ、私は自身の経験に照らして、この問題を解決できる可能性は大きいと考えています。が、しかし、その為にはそれなりに費用がかかると考えください。問題を解決する為には、費用を出し惜しみしてはいけない」
それを聞くと、ガマウシは顎に手をやり目を上に向け、左右に動かしながら、「ふーむ」とそう声を発すると、
「分かった。覚悟しておこう。出すべきポイントで、金を出さなければ経営というものは失敗をするからな」
と、そう応えた。ガマウシは、すっかり神原のペースに乗せられている。それを見て、俺はそう思った。
「何にせよ。まずは、このＣＡＳ冷凍保管庫から調べ始めます」
神原はそう言うと席を立ち、ガマウシ社長に頭を下げると、それから直ぐに社長室を出て行った。もちろん、俺は後を追った。

それから俺達は、小さな来客用のコミュニケーション・スペースで、話し合った。まず俺はＣＡＳ冷凍保管庫について説明する。
「ＣＡＳ冷凍保管庫というのは、固有名詞ではありません。特殊な電磁波を当てて細胞を壊さないように冷凍する技術を、ＣＡＳ冷凍というのです。ＣＡＳ冷凍保管庫の、ＣＡＳ冷凍とは、この技術を指します。このＣＡＳ冷凍により、食品の保存期間を数年以上伸ばせるのですが、それを活用した保管庫ですね」
そう俺が言うと、神原は面白そうに頷いた。
「なるほど。ＣＡＳ冷凍で保存しておけば、無駄に廃棄される食品をなくせると。保存しておいて、注文が来た時に売ればいいのだから」
「その通りです。無駄な廃棄をなくせば、ごみ処理の経費も削減

できるし、エコでもあります」
　そこまでを語り終えた後で、俺は少し黙る。それから、こう続けた。とにかく、何かを言わなければと思ったからだ。
「ＣＡＳ冷凍は、本当に素晴らしい技術だと思います。聞くところによると、医療分野で臓器保存にも応用されているのだとか。ですが、もしかしたら俺は、これが今回は仇になったのではないか、とも考えているのですよ。タイプにもよりますが、冷凍するとナノマシンは死にます。が、このＣＡＳ冷凍の所為で、死ななかったのではないか、と」
　その俺の言葉に、神原は「ふむ」と言い、こう続けた。
「可能性としては考えられますね。ＣＡＳ冷凍というのは、恐らく水の氷結に関する技術なのでしょう？　ナノマシンにも同じように効果があるかもしれない。しかし、決定的な要因ではないでしょう。そもそも、ナノネットを死滅させる為の処理を、その保管庫では行っているらしいじゃないですか」
「そうですね。保管庫に届いた途端に、その処理を行っているようです。ただ、その処理が完璧ではなかったのかもしれない」
　そう俺が返すと、神原はふぅとため息に近い感じで息を吐き出した。そして、少しの間の後で、次にこんな事を言ってくる。
「二村さん。茶番は止めましょう。あなたはそんな点が重要ではないと、実は分かっているのではないですか？」
　俺はその言葉に少し驚く。神原は更に続けた。
「いやいやいや。すいません。失礼を言いました。しかし、あなたはそれなりに頭の切れる人だ。先ほどの社長との会話で、少なくとも私はそう判断しました。だが、今回の件に関してはやる気がない。それで、真面目にやっているぞ、というスタイルだけを取っている。違いますか？」
　俺は何も返せなかった。ほぼ、その通りだったからだ。この男、やはり侮れない。神原は続けた。
「ナノネットが関与しているとして、そのナノネットにどんな性

質があるかを掴むのがまずは重要です。そして、後は殺された人達の経歴等も知りたい。どんな役割を与えられていて、どんな性格だったのか。趣味や生活習慣や、或いは何か宗教に入っていたかどうかも重要ですね。

この辺りの事はお願いできますか？　私は、あの地方の風俗だとか、特性だとかを調べたい。つまり、ナノネットの性質と育った土壌を掴んでおきたいのです。後は、調べ終えた後で、お互いに情報を交換しましょう」

そう言われて、俺は何も反論ができなかった。完全に主導権を神原に握られている。が、下に見られていると意識しても不思議と屈辱は感じなかった。そして、その後で更に神原はこう話を続けたのだった。

「ところで、二村さん。あの社長さんをどう思いますか？」

俺はその質問に少し驚いた。まさか、ガマウシだと思っているとは言えない。それで無難にこう返しておいた。

「多少、癖はありますが、優秀な人だと思います」

その返答を聞くと、神原は明らかにつまらなそうな顔になった。

「それは、そうなのかもしれません。しかし、私はこうも思いましたよ。典型的な支配者タイプだな、と。例えば、社長さんはあなたを自分の会社の人間というだけで、すっかり信用しているようでしたが、あなたは信頼を勝ち得るような何かをした事があるのですか？」

俺は首を横に振った。まさか、と思う。そもそも俺はこの会社に対しても、社長に対しても忠誠心なんて欠片も持っちゃいない。今回の仕事だって、面倒で仕方ないんだ。

「そうでしょう。でも、外部に漏らしてはいけない今回のような件で、あなたを呼び、あなたを使っている。私からすれば、随分と危ういと思える。つまり、あの社長は自社の者ならば、支配下にあると考え、道具のように使えると錯覚しているのですよ。自らの一部だと思っている。こういうのを、主客が未分化、と言うのですが

ね」
俺はその説明を聞き終えると、こう言った。
「そうかもしれません。しかし、そういう人は珍しくないのではないですか？」
これは本心だった。世の中、そういう奴がやたらに多い。人間、偉くなると駄目になるんだ。
「珍しくないでしょうね。人間は権力を握ると感覚が麻痺したり、判断力が鈍ったりするらしいのですが。もしかしたら、他人が存在しない、自分一人の世界に住み始めるのかもしれない。自分一人だけの世界だと、人はとても我儘になる。主客の未分化な幼児が我儘なように。
これは個人の話ですが、集団でも同じです。私は集団心理を重要視しているカウンセラーなもので、特に強調したいのですが」
俺はどうして神原がこんな事を語り始めたのかが分からず困惑していた。
「集団？」
「そう。集団です。例えば、政治の世界でも社会全体の事は考えず、自分達の為だけに税金を利用したりする連中がいるでしょう？
官僚や政治家。専制政治を敷いた国家。極めて自己中心的な判断を行う集団です。ところが彼らは個人を観れば、自分達の属する集団の為に行動していたりするのです。つまり、個人を単位に見れば、利己的とは言えない。が、集団を一つの主体と判断するのなら、利己的な行動を行っている。だから、監査機関には“外部である”という条件が必要なのですが。
因みに、封建主義だろうが、共産主義だろうが、資本主義だろうが、権力が一部に集中をすれば、似たような体制になるそうですから、これはイデオロギーの問題ではないのではないか、と考えられます。一部に権力が集中した資本主義企業の様相は、共産主義のようだと揶揄されていますよ。
要点を抑えるのなら、客体の存在しない世界では、意識あるもの

は、どんなものでも自己中心的になる、のです」
そこまでを語ると、神原は満足そうな顔になり、俺を見た。
「私は、あの社長。いえ、この会社にとってみれば客体です。そしてあの社長は、私を客体と認識していたからこそ、自己中心的な判断を捨てる事ができた。あなたが私を引き入れたのは、正解だと思いますよ」
そして、そう言ってにやりと笑ったのだ。相変わらず意味が分からなかったが、それでも俺は、なんとなく、この男が何を言いたいのかを察した気になった。

6. お母さん

（子供・新田恵介）

ずっとずっと昔。

幼い自分を意識した、それよりもずっと前。思い出せる限りの自分の過去。僕が幸せに笑っていたかもしれない時代。そんな可能性のある時代。

そんな頃を思い出そうとがんばってみる。

だけど、どうがんばってもそれは確りとした輪郭になりはしない。でも、それでも思い出そうとしていると、少しずつそんな頃が本当にあったような気がしてくる。でも、そんな曖昧な記憶は、もう夢と大差がない。だけど、それでもいい気がする。遠い過去の記憶なんて、夢とどれだけの差があるというのだろう？　だから僕はそれをそのまま受け止めようとしてみるんだ。

物心ついた頃。僕は既にその家にいた。母と二人暮らしで、母はその家は自分達のもので、だからお金がかからない、とそう言っていた。いったい、どうやって母がその家を手に入れたのかは分からない。遠い親戚に譲ってもらったとしか教えてもらえなかったんだ。それが本当かどうかすらも僕には分からない。いや、もし本当の事を詳しく教えてくれていたとしても、子供の僕には理解ができなかったかもしれない、けど。

母は仕事に出たり、家にずっといたりを繰り返していた。家賃もローンもないから、それほど稼ぐ必要がないのよ。そんな事を僕に言っていたのを覚えている。だから、そんなに熱心に働かなくてもいいんだと。だけど、ある時期から母はずっと家にいるようになった。しかも、ご飯も作らず、掃除もしない。一日中、家でボーっとしている。遂には、風呂にも入らなくなり、食事も二日に一度くらいになっていった。

僕がお腹が空いたと訴えると、母は酷く怒った。鬼のような形相で、僕に向かって「わたしに命令するな！」と怒鳴ってくる。僕は家の中でよく泣いた。泣いていると母が怒るから隠れてこっそりと泣いた。僕は母を憎んでいたように思う。だけど、それでも同時に僕は、母に甘えたがっていたような気もする。甘えたくて、甘えたくて。それで僕は、なんとかしなくちゃって思うようになっていったのかもしれない。

働かないと、暮らせない。お母さんが働かないのなら、僕が働かなくちゃ。

母が言っていた。家賃もローンもないから、それほど稼ぐ必要がない。それくらいなら、僕にも何とかなるかもしれない。家賃がどういう意味で、ローンがどういう意味なのかはまったく分かっていなかったし、“それほど稼ぐ必要がない”というのが、どれくらいの額なのかも分かっていなかったけど、必死に考えて僕はそんな結論に達した。

でも、困った。そう決めたものの、お金を稼ぐ手段なんて、幼い僕には見当も付かなかったからだ。そして、そんな頃、僕は初めて、里神に出会ったのだ。僕らの住む家。それを取り囲む林。その中を歩いている時に、話しかけられた。どこから聞こえてくるとも分からない声。そしてたくさんの犬の気配。その頃の僕は、お腹が空くと、よく林の中で食べられる草を探しては食べていたから、きっとそれでナノマシンを身体の中に取り入れてしまっていたのだと思う。きっと、そのナノマシンを利用して、里神は僕に“契約”を持ちかけてきたんだ。

『新田恵介…』

自分の名を呼ばれた気がして、林の奥深くを目指して進むと、いつの間にか、僕の周りを何かの動物の気配が取り囲んでいた。それを犬だと悟るまでには、大して時間がかからなかった。大きさ、や小さな声が犬のそれだと分かったから。僕は怖くなって竦んでしまった。しかし、そこにまた声が。

『恐れる必要はない』
それは静かな声だった。でも、それでも僕は怖がっていたけど。
『知っているぞ。お前は、どうやって生活をすればいいか、困っているな』
恐る恐る僕はこう尋ねた。
「どうして、そんな事を知っているの？」
『この林の中の出来事なら、私達は大体の事を知っている。お前の家もこの林の中にある。だから、知っている』
僕はそれを聞いてますます怖くなる。それで、逃げようとしたのだけど、周りは犬に囲まれていたから、その場を離れられなかった。犬が道を塞いでいたんだ。里神は、そんな僕にこう言った。
『逃げるな。話はまだ終わっていない』
僕は怯えながらこう訊く。
「話って？」
すると、里神はこう答えた。
『“契約”だ』
契約。
『実は私達にはお前を助ける準備がある。お前の生活を支え、そして、お前の母親の生活も支えてやろう。
お前は憐れな子供だ。援助を受ける資格が充分にある』
僕はその言葉に驚いた。
「なんで、そんな事をしてくれるの？　あなたは、誰？」
『私は“里神”だ。この辺りを棲家とし存在するもの』
「里神…？　何処にいるの？　姿を見せて」
『姿なら先から見せている。私達は、このお前を囲む自然に広がっている。この自然と同化していると言ってもいい。お前が見ている光景こそに、私達は存在している』
その当時の僕には、それが何の事だか分からなかったけど、今なら、辺りにナノマシンが拡がって生息している事だと分かる。でも、それを知らなかった僕は、里神を神秘的な存在だと感じ、昔話の中

に出てくるような、困った人を助けてくれる神様を思い浮かべていた。里神は更に言う。
『もちろん、私達もお前を頼る。私達がお前を助ける代わりに、お前も私達を助けるのだ。その意味は分かるな？』
僕は答えた。
「うん……、はいっ！」
『よし。良いだろう。先に進め』
言葉通りに僕が先に進むと、そこには缶ジュースが岩の上に置かれてあった。蓋は既に空いている。
『それを飲め』
里神はそう言った。僕はその言葉に従ってそれを飲んだ。少しの抵抗を感じはしたけど、既に抗えなかった。この神様が、僕を救ってくれると言うのなら。
缶ジュースは、甘くて美味しかった。飲み終わるなり里神は言った。
『“契約”成立だ。これで、お前は私達のうちの一つとなった』
その時の僕には意味が分からなかったけど、きっとその缶ジュースの中には、ナノマシンが大量に繁殖していて、それを体内に取り入れた僕は、その時に里神のナノマシン・ネットワークの中に組み込まれてしまったのだと思う。僕は里神にとって便利な端末になったんだ。人間社会にアプローチする為の。子供だから、まだあまり役には立たないけど、将来的にはもっと活用する気でいるのだろう。
そして、それから、僕の生活は変わった。
生活の世話を、里神の教団がしてくれるようになったんだ。お金をくれたり、ご飯をくれたり、洗濯をしてくれたり。掃除は自分でやったけど。後は犬達が僕の命令を何でも聞いてくれた。僕を警護してくれたり。
だけど。
だけど、母は、そんな状態が気に食わないらしかった。

お母さんが怒っていた。
久しぶりに外に行って、帰ってきた後の事だ。どうやら、外で誰かに何かを言われたらしい。僕に向かって、こう言う。
「あなた、いつの間に宗教になんか入ったの？」
鬼のような形相、に思えた。
どうやら、町では僕の事が噂になっていたらしい。母親が働かないから、生活する為に子供が宗教に入った、と。あんな子供に無理をさせて、なんて母親だ、と非難までされたようだった。それで、お母さんは激怒していたんだ。前から、家に来て世話をしてくれる人が何者なのか不思議がっていたし、それを嫌がってもいたのだけど。
「私に恥をかかせて！」
お母さんは、そう怒鳴った。僕はそれに怒鳴り返した。
「だって、お母さんが何もしてくれないから！」
僕がそう返すと、お母さんは更に怒った。
「煩い！　この親不孝者！」
「僕のお蔭で、お母さんだって暮らせているのに！」
「煩い！　お前なんか、そもそも産む気なんかなかったんだ！　どうして、生まれ来た！」
僕はその言葉に泣いた。
お母さんに甘えたくて。お母さんを助けたくて。それでやった事なのに。僕が泣くとお母さんは更に怒った。
「泣くなー！」
そして、その後で包丁を持って来てこう言ったのだ。
「お前なんか殺してやる！　なんで、わたしの思い通りにならないんだ！」
お母さんは、包丁を逆手に持って振り上げた。僕はその光景に固まった。殺される、とそう思った。怖い。
そしてその時だった。窓の外から、犬が二匹、僕の家の中に飛び込んだのだ。犬は包丁を振り上げたお母さんに噛みついた。お母さ

んはそれに全く抵抗ができず、そのまま、噛み殺された。
僕は茫然自失となり、その後の事はよく覚えていない。誰か、教団関係の人が来て、「この女は、殺されて当然の事をした」とそう言った。僕を慰めたんだ。何故なら、お母さんを殺したのは、僕だったからだ。犬は悪くない。僕はそれを分かっていた。恐怖にかられた僕が、犬に命じて、お母さんを殺させたんだ。無意識の内に。
僕がお母さんを殺した。
その後で、どうやったのかは分からないけど、それは事故として処理された。教団も責められなかったし、僕も罪には問われなかった。誰も必要以上には騒がなかった。
そして僕には、多分、何もなくなった。それから僕は、里神の端末として、ただ生きた。人間社会へアプローチする為の道具。

ある日、里神から連絡があった。別種のナノマシン・ネットワークが、この地域へ侵入しようとしている。
僕はそこに調査をしに行き、そして、たこを食べた猫の体内から、ナノネットを見つけた。その痕跡を読み取り、“たこ神”の文字を見つける。これは、近くの島で信仰されている宗教“たこ神教”だ。そして僕は更に、そこから女性の気配を感じ取った。こう思う。
これは、……お母さん？
僕はその気配に怯えた。里神は更に命じる。このたこ神を調査し可能なら駆除しろ。そしてその時にこう僕は結論出したんだ。
その為には、誰か他者が必要だ。客体としてそれを分化させてくれる他者が。

?7．神様と他人

（他人・三倉夕）

夏休みに入った。

あの例の、新田くんとの奇妙な出来事以来、彼には関わらないようにしていた。隣の席だけど、彼もあたしを無視してくれる。このまま何事もなく席が変って彼と離れ、彼と無関係になれればあたしの学生生活には何の問題もなくなる。

そう、あたしは思っていた。

そしてそれは、簡単だとも思っていた。夏休みを過ぎて新学期になれば、きっと席替えの一回や二回はあるだろう。今学期が終わるまでしのげばいい。そして、そうこうしている内に、何の問題もないまま、あっさりと今学期が終わり夏休みに入った。これで危機は回避できたはずだった。

そのはずなのに。

――なんでやねん。

当に、“なんでやねん”な事態があたしに起こってしまったのだ。いつも通り、猫に餌をやっていた時の事だ。日中は暑くて、猫もやって来ないから、それは夕方だった。

「いると思ったよ」

そう話しかけれられた。そしてそこには、なんとあの新田くんの姿があったのだ。あたしは心の中で“シェーッ”と叫んだ。顔を引きつらせながら、こう返す。

「どうしたの？　新田くん」

新田くんはそれを受けると、困ったような笑いを浮かべながらこう言ってくる。

「そんな、心の中で“シェーッ”と叫んでそうな顔をしなくても良いじゃない」

なんで分かった？
内心でそう思いながら、あたしはこう返す。
「何にも用がないのなら、あたしはもう帰るところだから」
危機回避能力を全開で振り絞って、そう言ってみたつもりだった。つまりは、全開でその程度なのだけど。お願いだ。あたしが嫌がっている事を察してくれ、とも思っていたかもしれない。しかしきっと、察していてもいなくても彼は構わず続けていただろう。こう。
「実は君に付き添って欲しくてさ」
「付き添う？　どこに？」
「ちょっと、岩盛島まで」
そう聞いて、あたしは吹いた。
「なんで？」
その“なんで？”には、なんで岩盛島まで行かなくちゃならないかのか、という意味とどうしてあたしが付き添わなくちゃならないのか、という意味とが込められてあったのだけど、新田くんはその後者の方の意味についてだけこう答えた。
「それは、君が“他人”だからだね」
しかも、訳が分からない。
なんで、他人だと付き添わなくちゃならないんだ？
あたしは心の中でこう返す。
百歩譲ってあなたの中の特殊な事情で、“他人”が岩盛島まで付き添うのに適任なのだとしよう。でもだとしたって、おかしくない？　そりゃ確かにあたしはあなたにとって他人ですよ。ええ、そりゃもう、まごうことなき赤の他人ですよ。でも、他人って言ったら、他にいくらでもいるでしょうよ。なんで、その多くの“他人”の中から、あなたはあたしを選択するのですか？
きっとその時、あたしは何とも言えない複雑な表情をしていたと思う。どちらかと言えば、憤怒寄りの。
「悪いけど、あたしはそんな遠出なんかできないから。家族がうるさいの」

少しの間の後で、そう答える。すると彼はこう言った。
「夏休みだから、友達と少し遠出するとでも言えばいいよ」
それから、少し考えるとこう付け足した。
「あながち、嘘でもないしね」
あたしはそれを聞いて、“あなたとあたしがいつの間に友達になったのかしら？”とそう思う。その後で、こう返した。
「はっきり言うと、嫌なの。大体、どうして岩盛島に行かなくちゃいけないのよ？　あたしと何の関係もないじゃない」
すると、新田くんは笑ってこう返す。
「関係ならあるよ。ほら、覚えているかい？　あの時のタコと猫の事。あの時に、僕が猫から読み取った情報に、岩盛島の光景があったんだ。どうやら、あの島にはナノネットが生息しているらしい。しかも、ここら辺りにもちょっかいを出している。僕はそのナノネットを何とかしろ、と里神から命令を受けていてね。少なくとも、ここら辺を侵略させないようにしないといけないんだ」
あたしはそれを聞くと、ため息を漏らした。
「新田くんが大変なのは分かるわよ。でも、どうしてそれにあたしが巻き込まれなくちゃならないのよ？」
そのあたしの言葉に、何故か新田くんは少し寂しそうな表情を浮かべた。そしてこう続ける。
「相手が普通のナノネットなら、僕一人が行っても問題はなかったかもしれない。でも、今回は駄目なんだ。僕にとって、危険な存在。誰か“他人”が見ていてくれなくちゃ、僕はどうなってしまうか分からない。きっと、自己のコントロールを失う」
その新田くんの言葉の意味は、あたしには分からなかった。いつも通り。でも、彼が必死なのだとはなんとなく察してしまった。静かだけど、彼は必死だ。それで、
「凶暴な相手なの？」
と、思わず問いかけてしまう。彼は答える。
「多分、違うと思う」

それなら、どうして？とあたしは心の中で訴える。じっと彼を観察すると、その表情から、よほどの事情があるだろう点はうかがえた。

「ただ、僕が僕を維持する為には、誰か“他人”が必要だというだけ。“他人”が見ているという意識が。もし、僕一人で向こうのナノネットの核に出会ってしまったら、きっと僕は自分を維持できない。そして、僕が知っている限りで、こんな事を頼める“他人”は君しかいない」

あたししか？

その新田くんの説明を聞いて、あたしは不思議に思った。他人なら、同じクラスにいくらでもいるじゃない。しかし、そんなあたしの疑問を察したのか、彼は次にこんな事を言って来たのだ。

「君さ。僕から獣の臭いを感じているだろう？」

あたしはそれに少し驚きながら、ゆっくりと頷いた。

「やっぱりね。あの猫での一件以来、君はナノネットに感応し難い体質なのじゃないかとそう思っていたんだ」

あたしにはその意味が分からない。彼は説明を続けた。

「里神のナノネットは、僕を護る為、周囲の人間にわずかながら干渉している。嗅覚を麻痺させて、僕の身体に染みついた獣臭を感じなくさせたりね。犬とよく一緒にいる僕からは、獣の臭いがするから。きっと、迫害の対象になる理由を削っているのだと思うのだけど。

しかし、それはナノマシンを通して行っているから、君みたいにナノマシンに感応し難い体質だと、上手くいかないんだ。それで、君は僕から獣の臭いを感じる。これが何を意味するか分かるかい？」

あたしは首を横に振った。すると、彼はこう答えたのだ。

「君が僕にとっての“他人”だという事」

いや、意味が分かりませんよ、新田くん。あたしはそう思ったのだけど、だから当然、納得もできなかったのだけど、だけど、それでも、そんな事は関係なく、あたしは“それ”に巻き込まれてしま

ったのだった。

フェリーの上で、あたしは何故か新田くんと一緒にいた。もちろん、これは岩盛島へと向かう便だ。結局、断りきれなかった。それは新田くんの不幸な生い立ちと、その寂しそうな表情にほだされてしまったのが主な原因だと思う。いや、単にあたしが押しに弱いだけなのかもしれない。

旅行用の中くらいのリュックをあたしは背負っていた。できる限り避けたいところだけど、「もしかしたら、泊まりになるかもしれない」、と新田くんから言われて、一応用意したものだ。着替えと歯ブラシやなんかのお泊りセット一式が入っている。

まさか、男の子と一緒に旅行することになるなんて。

あたしはそう思っていたけど、その相手の新田くんに色気は全くない。そんな気は微塵もないようだ。ま、もちろん、あたし自身もそれは同じなのだけど。

新田くんはフェンスに手をかけて海を眺めていた。強い風が顔に当たって、髪を巻き上げている姿はとても爽やかだ。それを見て、彼が普通の男の子だったらな、とあたしは少し思った。彼の両脇には、大きな二匹の犬が控えていて、それが怖くてあたしは彼の傍には近寄らなかった。可愛いとも思うけど、もし噛まれでもしたら洒落にならない。基本、あたしは猫派だし。

何も喋らないのも気まずいので、少し離れた位置からあたしはこう話しかけた。

「ペットも可で良かったわね、このフェリー」

あたしの言葉に二匹の犬は少しだけ反応してこちらを向いた。新田くんは、「そうだねぇ」と気のない返事をする。

もっとも、ペット可であるとは言っても、首輪とロープをつける事が義務付けられている。彼はそれを無視していた。船員がとがめないのは、二匹の犬が彼の傍を片時も離れないからだろう。少しは、怖くもあるのかもしれないけど。大きいから。

その二匹は、それぞれ“阿”と“吽”と言うそうだ。それぞれ、“あ”と“うん”と読む。あ・うんの呼吸の阿吽だ。と言っても、阿の口が常に開いていて、吽の口が常に閉じているなんて事はない。狛犬が、名の由来らしいけど、それには納得がいく。なんとなく狛犬っぽいもの。

そのうちに、不意に新田くんが口を開いた。

「ねぇ、三倉さん。神様って存在すると思う？」

なぬ？

あたしは警戒をする。また、電波な発言が出たと思ったからだ。

「それって、ナノマシン・ネットワークじゃなくて？」

そう返すと、彼は少し微笑んで「違うかな？」とそう言った。なんで、疑問形なの、とあたしは思いつつ、

「分からないけど、いないと思う」

と、そう返した。すると、新田くんははしゃいだ感じで「ブーッ」と言った。まるで子供みたいだ。まぁ、まだあたし達は子供だけど。

「正解は“絶対に存在する”なんだな、これが。と言っても、これは神様をどう定義するかによるのだけど」

「神様を定義？」

「そう。実は神様の存在を信じる科学者は多いって知っている？ あのニュートンは熱心な有神論者だったし、実はアインシュタインだって信じていた。ただし、少し詳しく内容を聞くと、人格神を信じているとは限らないケースも多いと分かる。ニュートンは信じていたみたいだけど」

あたしはその新田くんの説明を聞くと、少しため息を漏らした。そろそろ、彼の突拍子もない話にも慣れてきたので戸惑いは少ない。

「人格神って言うのは、意識がある神様ってな意味よね？ それ以外にも神様なんて存在するの？」

「するよ。例えば、アインシュタインは自然そのもの、この宇宙こそが即神だと、そう言っていた。この僕らの住む自然界が神だって言うのなら、間違いなく神は存在しているだろう？ もちろん、

意思なんて持っちゃいないよ」
「ふーん」とあたしは返す。まぁ、分からなくもない。
「この世界を創ったのが神様。この世界を存在させているのは、僕らも含めた大きな主体であるこの世界。なら、この世界こそが世界の創造主と言えなくもない。
と、まぁ、僕は思うよ。だから、自然がそのまま神様ってのは納得ができる。
でも人間にとっての世界ってさ、結局、自分で感じて自分が創ったものとも言えるだろう？　仮に自然がそこにそのように存在していたとしても、自分にそれが感じられなければ、それは存在しないんだ。なら、自分自身こそが自分にとっての神だとも言えるのじゃないだろうか？」
それを聞いて、あたしは降参した。
「ごめん。新田くん。ついていけない。何が言いたいの？」
最近になって少しずつ分かってきたのだけど、新田くんはかなり変な事ばかり言うけど、別に狂っているとか考え方が異常だとか、そういう事はない。ただ、言い回しが特殊な上に相手に理解してもらおうって意識が希薄なだけなんだ。少々、特殊な知識を持っているっていうのもあるけど。
「ごめん。きっと、三倉さんがどうして誘われたのか困惑していると思って、どんな説明をしたら分かってもらそうかってずっと考えていたんだ。こういう話なら理解してくれるかな？とも思ったのだけど、駄目だったかな？」
「ちょっと難し過ぎるわよ」
あたしはその言葉のお蔭で、少しだけ嬉しくなった。彼があたしに気を遣ってくれていると思ったからだろう。
「で、続きは？　一応、最後まで聞いてみる」
あたしがそう言うと、新田くんは続きを語り始めた。
「主客の判断がつかない幼児の頃は、母親と自分とを同一視していると言われている。先の話に当て嵌めるのなら、母親が神で自分

も神だね。そしてだからなのか、幼児は自分を制御できずとても我儘だ。神様はとってもエゴイストで、なんでも自分の思い通りにしようとなさってしまう。

実は僕は、自分にもそんな傾向があるかもしれないって不安なんだ。だから、“他人”を感じたい。だけど僕は、ナノネットを通じて人と繋がっている。本当の意味で、僕の他人になれるのは、僕と接しながら、ナノネットの影響を受けない人間だけ。そしてそれが君だったんだ。

僕が僕を維持する為には、他人の目を意識する必要がある。この先にいる相手と会うと僕はどうなるか……」

そう言いながら、新田くんは海を指差した。そして、

「ほら、見てごらん、たこがいるよ」

と、そう呟いたのだ。

確かに海面の下には、うっすらと巨大なタコの姿が見えていた。

あたしは、彼の言葉に少しだけ不安を感じた。

?8．たこの神

（たこの神・大村ゆかり）

騙された、のかもしれない。

と、わたしは思った。

ここに元いた男はどうやら、この場所から逃れたがっていたようだったから。代わりにわたしが捕まったから。

でも、例えそうであったとしても、別にいい。騙されたと思ったその当時は、怒りを覚えたけど、時間が経つとそうでもなくなった。なんだか、怒るのも面倒くさい。ここには生活の不安がない事だけは、確かだし。あの時にたこが言ったように、働かなくても暮らしていける。

それに、他人と離れて暮らせるのはいい。気を遣わないで済む。ここには滅多に人が来ない。そういうルールを作ってくれていた点は、元いた男に感謝しなければならない。わたしだって、あんな連中と関わるはご免だ。いくら、わたしが連中の“たこの神”だったとしても。

“たこの神”。

あまり、華麗な響きではない。

あのたこを食べ終えてからしばらく過ぎた後、親戚の家にいたところに、たこ神教の連中がやって来た。そして、「ここに我らの神がいるから会わせて欲しい」、とそう訴えてきたのだった。親戚はたこ神教には入っていなかったから、何の事だか分からなかったようだ。だけど、わたしには思い当たる節が。もちろん、例の神と名乗るたこを食べた件だ。

わたしが姿を見せると、たこ神教の連中は「おお、あの方だ」とそう言った。わたしは驚いてしまう。それから、たこ神教の連中は「あなたこそが、我々の新しい神に他なりません。どうか、一緒に

来てください」と、そう言って来たのだった。親戚が、酷く驚いた顔でわたしを見ていたのを覚えている。そして、もうここにはいられないな、とそれを見てわたしはそう思った。それで、早々に覚悟をして引っ越しを決心した。よく分からないが、彼らがわたしの生活の世話をしてくれそうだったからだ。

荷解きをしていなかった点が、幸いした。お蔭でその引っ越しはスムーズに進んだ。たこ神教の連中は、わたしが前もって用意していたのだと勘違いしていたが、もちろんそんな事はない。面倒くさいから、親戚の元に引っ越したまま放置していただけだ。

親戚はわたしがたこ神教の元へ引っ越そうとするのを奇異な目で見守っていたが、不思議と罵詈雑言の類は言わなかった。その視線からも敵意や悪意は感じられない。彼らはたこ神教を避けてはいるが、特別嫌っている訳でもないからかもしれない。

たこの神の“部屋”は（なんだか、嫌な響きだけど、彼らはそう呼んでいた）、不思議な事に海ではなく、山にあった。山の中腹に小屋が建てられてあって、そこが神のいる場所なのだという。ただ、と言っても小さな島だから、直ぐそこまで歩けば崖があり、その下は海だったのだが。わたしは山道を歩くのが面倒で、それに辟易した。筋肉痛になってしまう。

聞くと、昔、山岳信仰で使われていたものを利用したらしい。もちろん、新しく建て直されていて、中は綺麗だ。近代的で、テレビやパソコンまである。

詳しくは知らないのだが、山岳信仰と言えば女人禁制であった気がしたから、わたしがここにいても良いのか？と聞くと、その小屋を案内してくれた女性は少し笑った。

「それは昔の話ですし、山岳信仰のものを利用している、と言っても何も我々は山岳信仰を全てそのまま引き継いでいる訳ではありませんよ。むしろ、新しく生まれ変わっている。

それに、山岳信仰は、本当の意味で女人禁制ではありません。何しろ、山そのものが実は女体である、という話があるくらいです。

山に篭って出てくる、とは母体を通して生まれ変わり、清められる儀式だとも。でも、母体から生まれるのは、何も男性ばかりではありません。女も女の身体から生まれます。あなたがここにいるのは筋が通っている」

そう言われて、わたしは何か奇妙な気分になった。つまり、ここは母親の胎内という事になるのだろうか？　そして、その山岳信仰についての話を聞いて、わたしは急に不安にもなった。わたしは神の立場になったのに、このたこ神教の教義を知らない。そう言うと、またその女性は笑った。

「神様が何を言っているのです？」

確かにそうなのだけど、事実、知らないものは知らないのだ。せめて、前の神がどんな事をしていたかだけでも教えて欲しかった。そう訴えると女性は、

「あなたは神様です。神であるあなたは、教義を意識する必要はありません。もしお望みでしたら、変えたり、付け加えたりしてくれても構いませんが」

そう淡々と説明をした。なんだそれは？　とわたしはそれを聞いて思った。神が教義を意識しない。そんな宗教、聞いた事がない。だが、その後で思い出したように女性はこう言ったのだ。

「ああ、そうだ。でも一つだけ、絶対に忘れてはいけない事があります」

「なに？」

「一週間に一度は、絶対にたこを食べなくてはなりません。しかも、生で」

わたしはそれを聞いて、更に混乱した。たこを神と信じる宗教が、どうして“たこを食べなくてはいけない”、というのをルールにしているのだろう？

女性はわたしが教義を自由に変えても構わないと言ったが、そういう作業は不向きなので結局は、以前のものをほぼそのまま踏襲さ

せてもらった。正直、興味がないので面倒くさくて堪らずやる気が出なかったのだ。ただ、一点だけは追加したが。

――子供を産み、育ててはいけない。

わたしは人類は増えるべきではない、という思想の持ち主なのだ。もっとも、既に生まれてしまった子供に関しては良しとした。流石にそれは仕方ないだろう。

しかし、それ以外の宗教的な事柄は、わたしは積極的に避けた。宗教は嫌いだし、いつまでもここにいるつもりもなかったからだ。頃合いを見つけて、逃げ出してやるつもりだった。ここに近づくな、と言うと、信者達は簡単に従ってくれるし、それは容易だと思えた。

しかし、不思議な事に、この“たこの神の部屋”から遠く離れようとすると、わたしは眩暈を覚えて一歩も進めなくなってしまうのだった。これでは逃げ出せそうにもない。おかしいと思い始めたのはその頃からだった。もしかして、たこの神になると、この場から離れられなくなるのではないか？

そう思ったわたしは、部屋の中に、ここについての何か情報が残っていないかと探した。すると、男の字で書かれた、何か日記のようなものが出てきた。恐らく、前にここに住んでいた男のものだろう。そこには、何とかこの場所から逃れようとする悪戦苦闘の記録が綴られていた。ここにいる限りは、生活が保障されている。しかし、この場所からは逃れられない。どうやら、そういう事らしかった。

冗談じゃない！　わたしは、こんな場所に一生い続けるつもりなんてない！

そう思った。しかし、同時にわたしは現にここから男が逃げ出せている、その事実にも気が付いていた。わたしがその身代わりとして捕まっているが。身代わり。それで、悟った。つまり、そういう事か。恐らくは、次の身代わりを見つけられれば、わたしはここから逃げ出せるのだ。男がしたように。なんだか、何かの怪談のように思えなくもない。だが、それから途方に暮れた。

……その為には、どうすれば良いのだ？
あの時、わたしはたこを食った。どうやら、たこが鍵になっている点だけは確かなようだ。しかし、どうすればその身代わりを見つけられるのか、どうすれば身代わりにできるのかは全く分からなかった。

「たこを食べてもらわなくては、困ります」
たこが、どうやら鍵だと思ったわたしは、それから出される夕食の中の、たこを残すようにした。食べてはいけない気がしたからだ。しかし、どこに捨てようとも、何故か信者達にはたこを食べていない事がばれてしまう。しかも、
「たこを食わなければ、あなたは神ではありません」
と、そう脅してくる。神でなければ、生活は保障されない。つまり、食べ物も届けられなくなる。そしてわたしは、この場所から逃れられない。これは、つまりは、飢え死にを意味しないだろうか？
そう思ったわたしは、それからはたこを食べるようにした。食べれば食べるほど、深みに嵌ってしまう気もしたが。男の日記をよく読んでみると、男がこの日記を記し始めたのが、たこを食べ続けた後で、既に手遅れの状態になっていたのが、なんとなく察せられた。しかも、“海の中でたこになって泳いだ”とある。なんだこれは？
“恐らく、その泳いでいる自分自身が、主だろうと考える”
とも。
わたしはそれを読んで、ふと思った。これは、あの時にわたしが食べたあのたこではないだろうか？　わたしが食べたのは、この日記を書いていた男が乗り移ったたこだったのか？
そして、やがてたこを食べ続けるうち、わたしもたこになって海で泳ぎ始めた。初めの頃は夢の中で、たことして泳ぐ。次第に、起きている状態でも、たこに意識を移せるようになってきた。たこの視界は、人間のそれとは違ったが、慣れれば景色がよく分かる。そして驚いた。

何故か、この海のたこは群生し、集団で生活していたのだ。たこは、確か単体で暮らす生き物ではなかったか？　詳しくは知らないが。それがわたしの知識不足であったとしても、まだ信じられない光景があった。なんと、たこが集団で巣を造り、共同生活をしているようなのだ。

足を器用に動かして、道具を使って綱を利用し罠まで作っている。信じられない。たこが無脊椎動物の中では、特に頭が良いとは言っても。たこが道具を使っているシーンが撮影されたが、それはせいぜい、ヤシの実で身を隠す程度だったはずだ。そしてその頃に、海でたこに接触しようとする、この島の人間ではなさそうな連中の気配をわたしは感知したのだった。

その連中は、どうやらたこを利用して何かをやりたがっているようだった。一か所に集めて網で囲い、餌をやったりしている。何が目的かは分からなかったが、やがてその連中の感覚や考えている事が、わたしには何となく分かるようになってきた。そいつらはどうやらたこを食べているらしい。“だから、か”とわたしは思う。そろそろわたしも学習していた。この島のたこには食べると感覚が繋がる不思議な力があるのだ。あの時、わたしがたこに話しかけれたのだって、きっとそれが原因だ。わたしは、この島に暮らしてからたこを数匹食べている。よく冷静になってみれば、あのたこはわたしの考えている事を知っていたような気もするし。

連中はよく海の傍にいるので、感覚を捉え易かった。そして、心を覗いている内に、その連中が、どうやらたこの養殖を試みているだろう点に気が付いた。わたしは思わず笑ってしまう。よりによって、この島のたこを選ぶだなんて。

わたしは彼らの一人に話しかけた。特に感覚を掴みやすい奴がいたのだ。話しかけると、そいつは酷く驚いていた。まぁ、当然だろうと思う。

そしてわたしは、交渉を始めたのだ。わたしが、たこの養殖を手伝う代わりに、お前らもわたしを助けてくれ、と。

実は他のたこを操る能力も、どうやらわたしには芽生え始めていたようなのだ。しかもその感覚は、急速に冴えて来てもいた。わたしの力を利用すれば、養殖なんて簡単に行えるだろう。

わたしは考えていた。この連中を利用すれば、いつでも“たこの神”の立場から逃れられるはずだ。しかし、たこの神でなくなってしまったら、わたしには生活の術がなくなってしまう。流石に、もう親戚の家を頼る訳にもいかない、というか、この島で暮らす事も無理だろう。

なら、“たこの神”でなくなる前に、できるだけお金を貯めておいた方がいい。一人でもしばらくは暮らせるように。

わたしはそう考えていた。

?9．神の敗北

（怪談ルポライター・山中理恵）

岩盛島に着くと、私はそのままたこ神教の取材へと向かいました。時間も予算もそんなにはないので、無駄な事に割いている余裕はなかったのです。本当は、もっと色々と見て回りたかったのですけど。前もって、連絡を入れていて、約束の時間に間に合いそうにもなかった、という事もあったのですが。

たこ神教というからには、本部は海の近くなのかと思っていたのですが、意外にもそこは山の中でした。と言っても、小さな島なので確りと海の気配もあるのですが。

教団の施設は、意外にもオープンな感じで時代劇の茶屋に似ている感じの、青空が見える休憩所があり、そこに招かれます。リラックスできる感じ。本当に解放感があり、近くの木陰では大きな犬が一匹、休んでいたのですが、それを誰も追い払おうとしませんでした。聞いてみると、教団の犬ではないそうです。見ないけども、毛並が確りしているので何処かの飼い犬ではないか、とも。いずれ飼い主が現れるだろうから、放っておいても構わない、とも言っていました。その寛容さに、私は好印象を持ちます。

私の相手をしてくれたたこ神教の方は、年輩の女の人で“感じ”は良さそうでした。話を聞くと、たこを神としているとは言っても、特に宗教として変わった点はなく、民俗信仰に近い雰囲気を私は感じました。ただ、どことなく、山岳信仰の気配を匂わせてもいたのですが。蛸が蛸壺に入るのと、山岳信仰における山に篭っての浄化を、同一視し、更に蛸壺も山も母体と見なしているような。もっとも、これは飽くまで私の感想であって、本当にそうなのかまでは分からなかったのですが。ただ、一つ変わった点があるとすれば、生の蛸を週に一度は食べなくてはいけない、という妙な決まりがある

点でしょうか。
「蛸薬師の影響でしょうか？」
と、私が質問をすると、その女の人は「いえ、全く関係がありません」と、そう答えました。蛸薬師には、病気の母を思った僧が、戒律を破ってまで蛸を買ってきたところ、その蛸が池に飛び込んで光明を放ち、たちまち快癒したという、そんな由来があるのです。ですが、それが関係ない。何か意味があるのかと尋ねると、神聖なる蛸を体内に取り入れる為だと説明をしてきました。どうにも、何か弱い気がします。私は、当然、ナノネットとの関連を疑いました。ナノマシンが繁殖している蛸を食べ、そのネットワークを維持し続けているのではないか？と。もちろん、そんな質問はできませんでしたが。
「蛸を神としているのに、山に教団施設があるというのも珍しいですね」
私がそう言うと、
「海か山か、という観点が重要なのではありません。そこが精神の浄化にとって、適しているかどうかが重要です」
と、その女性は説明してきました。
山の神は女で、醜い。だから、醜いオコゼを持っていくと喜ぶ。などという話があるのですが、私はその時にそれを思い出しました。オコゼは海の魚ですから。もっとも、今回は全く関係なさそうですが。余談ですが、ヤマノカミという名の魚が存在します。恐らく、これも山の神信仰の影響があるのではないか、と考えられます。
そこまで話を聞いて、私は自分の考えを改めました。『人類は増えるべき種ではないから、これ以上増やさない為に、子供を産んで育ててはいけない』。そんな教義を聞いた時、どちらかと言えば、たこ神教の神は、キリスト教的な絶対神に近いのではないか、と私は想像していたのですが、どうにも、日本の昔ながらの神様な雰囲気がある気がします。
海も山も同じように重要、という話も日本の“異界”、或いは“

あの世”の感覚と通じる気がしますし。
世界には、あの世を遠い世界と考えるのではなく、一つ山の向こうや海の向こうには、死んでしまった人間達が住んでいる、という“地続き”のあの世や異界を想定する文化もあるのです。日本にも色濃くそれはあり、隠れ家や龍宮などは、その一例だとも言えるでしょう。因みに、あの世は異界全般に通じます。少し離れれば、知らない世界だらけ、という事でしょうか。その意味で、海も山も異界であり、その地で“生まれ変わり”の儀式が行われる。このたこ神教には、どうやらそんな趣があるようなのです。
そして、だからこそ私は疑問に思いました。人類の絶滅を願うような、子供を産み育ててはいけない、という教義は明らかにたこ神教において異質に思えたからです。私がそんな疑問を口にすると、女性はこんな説明をしました。
「その教義は、神が代替わりをした事で、新たに発生したものなので、異質に思えるのでしょう」
私はその説明に驚きました。
「神が代替り？　神は蛸ではなかったのですか？」
「いかにも、神はたこです」
しかし、質問をしても、どうにも要領を得ません。これまでの明確な説明とのギャップに私は混乱しました。
「その、神であるたこが替わる、という事でしょうか？」
「その通りです。神はたこですが、全てのたこが特別という訳ではありません。その特別なたこが新しく変わったのです。正確に言えば、たこの柱となる存在が、新しくなったという事なのですが。
そして、その新しい柱が、今回のその教義をお作りになられました。私どもはそれに従ったまでです」
どうにも、私はその話を聞いて不思議な気持ちになりました。宗教とは、一つの思想なりなんなりがあり、それを軸として組織や教義が体系付けられるものです。その軸がぶれるのならば、それは三流の宗教です。儲け中心か一部の人間達の専制的なもので、矛盾の

ある内容がボロボロと出てくる。長続きするようなものではありません。私はこのたこ神教はそういうものとは違うのではないかと思っていました。でも、その話を聞いて、もしかしたら、ただのハリボテなのかもしれないと思います。それで、揺さぶってみようとこんな話をしました。

「すいません。突然ですが、少し変わった質問をしてよろしいでしょうか？　感想を聞いてみたくなったもので。キリスト教の神、その矛盾に関するお話なのですが」

「かまいません」

「ご存知でしょうが、キリスト教の神は全知全能で、全ての創造主です。ですが、だからこその矛盾もはらんでいる。キリスト教を脅かす悪魔の存在。キリスト教の神が全知全能で、創造主であるというのなら、その悪魔すらも神が創造した事になる。この悪魔は異文化とも関係がありますが、ここでは特に言及しないようにしましょう。

これに対する解釈として、悪魔の存在は“神の弱さ”であるというものがあります。そして、ここからが少し面白いと思うのですが、その悪魔を憎悪し殲滅する事は、“神の敗北”とも言われているのです。これはキリスト教が信念を重要視し、様々に葛藤する上で辿り着いた解釈の一つで、その成熟を意味しているのかもしれません。

この葛藤は、良いか悪いかは別問題にして、キリスト教が一つの信念を抱えている事の証明でもあるでしょう。あなたは、この話をどう思いますか？」

私が強引にこんな話をしたのは、もちろん教義の矛盾に関する葛藤、という部分に対する女性の反応が見てみたかったからです。

「とても面白い話ですね。私もそこまでは知りませんでした。いえ、キリスト教に関しては疎いもので」

しかし女性は、私が期待するような反応は見せてくれませんでした。その意図を察しないほど、鈍いとも思えなかったのですが。女性は少し笑うとこう続けました。

「全ての主体であるのが神ならば、悪魔も神の一部に過ぎない。そして、それを憎悪し殲滅する事は、神の敗北。
ならば、この場合、神が勝利するにはどうすればいいのでしょう？　その悪魔をどうすれば、神は勝利できるのか」
気付くと私は逆にそんな質問を受けていました。そして真面目に考えてしまう。意味深げに女性が口を開いたので、真摯にそれを受け止めてしまったのです。言葉遊びや、舌戦の類でそれを口にしたようには思えなかったからかもしれません。
「これは私見ですが。悪魔を受け入れる事だと思います。ただし、自らの主体の一部などと考えるのではなく、客体としてそれを認識した上で」
私はそう答えます。
「なるほど、面白いお話です」
それを聞くと、女性は満足そうにそう答えました。
「その話、私どもの宗教にも、関係があるかもしれません」
そして、そう付け加えたのです。

取材が終わって、私はどうにも釈然としない思いを抱えました。神の代替り。それが何を意味するのか、結局、分からなかったからです。しかも、それによって宗教の信念体系とは全く異なった教義が追加されるなんて、私にはどう考えても異常に思えます。宗教を支配する神にならば、例え矛盾する内容でも自由に決められる、とでも言うのでしょうか？
しかし、そこまで考えてふと思ったのです。世界全体などではなく、たこ神教内部の話というのなら、先のキリスト教の抱える矛盾はそのまま適用できるのではないか、と。
それに、山岳信仰において山は母体。幼い子供は母親と自分を区別していないとも言われており、全能感を持つ。自分という限られた存在を実感するのには、何よりも、自分の中の矛盾に気が付き、その葛藤に打ち克つ事が必要。……なんだか、繋がりがあるような

気もします。
何かありそう。
それで私は、もう少し調べてみようと思ったのです。“子供を産み育ててはいけない”、という教義が神の代替りと共に生まれたのだと言うのなら、その教義が生まれた時期こそが、神の代替りと一致するはずです。
教団側の資料にそれはあり、調べてみると、奇妙な事実に気が付きました。この島の近辺の蛸に関する怪異の噂話、その発生の時期と神の代替りの時期が一致するのです。更に、この島で蛸の養殖が行われるようになった時期もその辺りです。
ですが、そう思ってその辺りの事をもっと集中して調べてみようと思った矢先に、事件が起きてしまったのでした。この島で行方不明になっていた、経済雑誌の記者が、なんと死体で発見されてしまったのです。
記者は崖から転落したと見られ、どうやら即死という事でした。更にその崖の下には他にも人間が、生存者がおり、それは蛸養殖を行っている会社の社員だと言うのです。
その会社員は、この数日間、姿が見えず安否が気遣われていたのですが、同じく崖から転落したものの海に落ちたお蔭で助かったと見られ、その後は、海の生き物を食べ続けて飢えを凌いだのだとか。一応、ルポライターである私は、この件を取材しない訳にはいかなくなってしまったのでした。

?１０．山の中のたこの神

（他人・三倉夕）

岩盛島に着くと、あたし達は海の近くにある定食屋で、まずは昼食を取ることにした。新田くんが何よりも必要だと言い張るから。犬達の餌は用意していたらしく、先に食べさせると、新田くんはこう言う。「少し離れた場所で待っていろ」。すると、二匹とも大人しくその言葉に従う。なんて従順。しかも少しだけ主人を心配しているような、寂しがっているような視線を向けている。なんて健気。基本的には猫派のあたしも、その態度には心惹かれてしまった。可愛い。

思わず抱きしめてやりたくなる衝動を抑えつつ、あたしは新田くんの後についていった。彼は二匹を全く気にしていないようで、振り返りもせずに定食屋に向かっていたのだ。定食屋には人気がなかったけど、既に昼時は過ぎているから、繁盛していないかどうかは分からなかった。

席に着くと、新田くんは「刺身とか生ものは大丈夫？」と尋ねてきた。「平気だけど」と答えると、彼は「そうか」と言い、なんと勝手に海鮮丼を注文してしまう。

「ちょっと、なんであたしの分も注文しちゃうのよ！」

と、抗議をすると、

「良いじゃない。僕がお金を出すのだし」

と、彼は澄ました顔で返してくる。どうしてくれよう。

ただ、出てきた海鮮丼はとても美味しかったので、まぁ、よしとした。食べ終えると、早々に新田くんは外に出る。そのまま直ぐに犬達の元へと戻る。

二匹は心配そうに「くーん」と鳴いた。ああ、可愛い。とあたしは思う。本当に抱きしめたい、などと思っていたら、新田くんが二

匹を抱きしめた。
「よし、よし。心配かけたね。あの程度なら、全く問題なさそうだよ。それに、こっちからハッキングしても気付かなそうだ」
そして、そんな事を言う。何の事やら、と思っていると、新田くんはあたしの心中を察したのか、あたしを見てからこう言った。
「予想通り、君も全く問題がないみたいだ。よほど、ナノマシンに感応し難い体質なんだろうね。良かった」
「どういう意味？」
「この島には、ナノマシンが豊富に繁殖しているって話だよ。僕らは先の食事で、ナノマシンを体内に取り入れたって訳。あの海鮮丼には、タコの刺身もあったけど、恐らくはタコだけじゃないと思う」
あたしはそれを聞くと、少し考えてからこう言った。
「つまり、もしかしたら、その食べたナノマシンを通して、あたし達は操られてしまっていたかもしれないって意味？　下手したら」
新田くんは表情も変えずにこう答える。
「その通り」
あたしはそれを聞いて、彼を殴った。
「そういう事は、食べる前に言いなさい！」
グーで。
「怒らないでよ。大丈夫だろうって自信ならあったんだ。この島に来る前に、確かめていたから。採取した、この島のナノネットには既に里神に憑かれている僕を、操作するほどの力はないって。君についても、それは同様。人の心に干渉する力は弱いみたいだ。それに、もしもの為に、阿と吽を待機させていたのだしね」
あたしはその言葉に少しだけ驚いた。
「もしかして、だからワンちゃん達には用意していた餌を与えたの？　この島の食べ物じゃなくて」
「そうだよ。僕が実験台になって、まずは平気だって事を確かめてから、阿と吽にはこの島の食べ物を与えようと思って」

その説明を聞いて、あたしは少し新田くんに好印象を持った。犬じゃなくて、自分を実験台にするなんて。
「力はこいつらの方が全然強いからね。もしも操られたら、僕は止められない。逆なら可能だけどさ」
彼はそうも続けた。確かに正当な理由ではあるのかもしれないけど、それでも、なかなかできる事じゃない。あたしは感心してしまった。
「さて。安全だろうと分かったところで、調査だ。阿に吽、ナノマシンをばらまいて来るんだ」
そう言うと、新田くんはカバンの中からビンを取り出した。中には液体が入っている。そしてそれを、犬達に振りかけた。
「行っておいで」
そう新田くんが言うと、犬達は走り出した。察するに、あの液体にはナノマシンが大量に含まれているのだろう。あの二匹は、走り回ってそれをばらまいているんだ。あたしは二匹が去った事を少し残念に思う。ようやく、かなり可愛いと思えるようになってきたところだったのに。
「よし、僕も行くか」
次に新田くんはそう呟くと、ゆっくりと歩き始めた。
「どこにいくの？」
あたしがそう尋ねると、新田くんはこう説明してきた。
「僕にはナノネットを感じ取れる能力があるからね。たこ神のナノネットを感じながら歩いて、大体の分布を掴んでおこうと思って。あの二匹が、ナノマシンをばらまいてくれているからやり易いし」
ふーん、と思いながらあたしはそのゆっくりと歩く新田くんに付いていった。傍目には、散歩しているようにしか見えない。まぁ、それで良いのだろうけど。
「で、あたしは何をすればいいの？」
あまりに暇なので、そう尋ねると新田くんはこう答えた。
「何もしなくていいよ。ただ、一緒にいて、ボーっとしてくれて

いるだけでいい」
ヲイ。
あたしはそれを聞いて、心の中でツッコミを入れる。相手が相手で状況が状況なら、無理をすれば、ロマンチックな台詞に思えなくもないところだけど、相手が新田くんで状況がこんなだから、少しのトキメキもない。
なんだかなー　と思って、仕方くあたしは周囲の景色でも楽しもうと辺りを見渡した。綺麗なだけが救いだ。そんな時、あたしは旅行鞄らしきものを抱えた、女の人が山道を登っていくのを見かけた。この島の人には思えなかったので、しばらく目で追ってしまう。それで、看板が目に入った。
この先、たこ神教、本部
へぇ。あたしは思う。あの人は、恐らくたこ神教に用があって行くのだ。
「何の用かしら？」
思わずあたしはそう独り言を漏らした。すると、新田くんがその言葉に反応を示す。
「誰かいたの？」
意外な事に、驚いた様子。そう言われて、あたしは歩いていく女の人を指差した。
「あそこに、女の人が歩いているけど。どうしたの？　ナノネットの反応でもあったの？」
「いや、逆だよ。全く、ナノネットの反応を感じ取れなかった。きっと、あの人はナノマシンに感応し難い特異体質の持ち主だ。ちょっと、興味深いね。そんな体質の人が、たこ神教の本部に向かっているのか」
そう言うと、少し新田くんは目を閉じた。集中しているように思える。ちょっと時間が経ってから、叫んだ。
「阿！　こっちだ！」
犬を呼んだのは分かるけど、名前が一文字なだけに、知らない人

が聞いたら変に思うかもしれない。ま、新田くんがそういうのを気にしないのは、知っているけど。
しばらく経つと、道路を駆ける　カッカッカッ　という足音と共に、阿がそこにやって来た。凄い。そして、羨ましい。あんなに遠くにいても、直ぐに呼べるんだ。
「いいかい？　阿。あの女の人を追うんだ。きっと、誰かと会うだろうから、傍に近付いて話を聞いて」
阿はそれを聞くと再び駆けた。その光景を見て、猫も良いけど、犬も良いな、とあたしは改めて思う。
「さて。僕らも行こうか」
それから新田くんはそう言う。あたしはそれを聞いて、“マジ？”と思った。山道を登るのが嫌だったのだ。
「意識を集中すれば、阿の聞いた声をナノネットを通じて僕も分かるのだけど、近くじゃないとやっぱりきつくてさ」
あたしは嫌な気持ちを表情に出してしまっていたのか、新田くんは言い訳をするようにそんな事を言った。そこでふと思った。今までの経験から分かったけど、新田くんは、案外、人の表情の変化に敏感だ。人間関係や空気を読む能力がないのかとも思っていたけど、少し違うのかもしれない。それを察した上で、あまり重要視していないのかも。いや、疎んじているのか。分からないけど。
それからしばらく山道を登ると、新田くんは木陰の岩の上に腰を下ろした。
「ここら辺りがいい」
そう言うと、水筒を出して麦茶をあたしに淹れてくれた。本人もそれを飲む。あたしは少し不安になってこう尋ねた。
「まさか、これにも大量にナノマシンが入っているとか？」
「いや、普通の麦茶だよ。山道を登って汗をかいたから、水分補給。ま、少しは混ざっていると思うけど。でも、どちらにしろ、君には関係ないと思うけど」
そう分かっていても、気になるものは気になるのよ。心の中で返

しながら、あたしは麦茶を飲んだ。乾いた喉に、それはやはり美味しかった。飲み終えて新田くんを見ると、彼は既に意識を集中し始めているようだった。阿の耳を通して、会話を盗聴し始めているのだろうと思う。しばらくが経つ。新田くんは不意に少し寂しげな笑みを浮かべると、こう言った。

「なるほど。悪魔に対する憎悪とその殲滅は、“神の敗北”ね。だとするなら、僕は負けてしまった事になるのかな？」

何の事か分からない。それは、いつもの事だけど、何だか今回は特別な気がした。

「どうしたの？」

と、あたしが尋ねると、「いや、別に。どうやら、さっきの女の人は、何かの雑誌の記者みたいだ。たこ神教を取材に来ていたらしい」とそう彼は答えた。

「それと、僕らが目指すべき場所が、どこかも分かった。山の中だ。たこ神のナノネットの核は、どうやらそこにいるらしい。意外にも海じゃなかったんだ。このまま探していたら、たくさんの時間を浪費していたかもしれない。危ないところだった」

あたしはそれを聞いて、こう訊く。

「山の中？　と言っても、範囲広いわよね。簡単には見つからないのじゃない？」

「いや、そうでもないと思うよ。本部がここにあるって事は、この近くだろう。後はナノネットの流れを読んで、それが色濃く集中しているような場所を探せば良いんだ」

それから新田くんはまた意識を集中し始めた。目をつむる。あたしはそれで、またやる事がなくなってしまった。ボーっとする。一時間ほどが経って、日差しが柔らかくなり始めた頃に、彼は言った。

「よし。大体は分かった。阿と吽を呼び戻そう」

あたしはそう言った彼に、こう訊いた。

「ちょっと待って。まさか、今からそこに向かうの？　そろそろ戻らないと、今日中には家に帰れなくなるわよ。フェリーがなくな

っちゃうから」
「そうだね。もう、今日は帰れないと思うな」
「って、本気？　何処に泊まるのよ？」
「その当てなら、もうあるよ。しかも、無料だ。もしかしたら、泊まりになるかもしれないって僕は言っておいたろう？」
あたしはその言葉に唖然となった。
「当てって何処？」
「山の中のたこの神のとこ」
「へ？」
その言葉を聞いて、あたしは彼に付いて来てしまった事を、徹底的に後悔した。

それから阿と吽が帰ってくると、近くの泉で水を与え、あたし達はその山の中のたこの神の住み家を目指した。途中、『この先私有地』という看板と柵があったけど、新田くんはそれを無視して入ってしまう。もっとも、そんな事くらいは予想していたけど。
この、ロックンローラーめ！
心の中でそう思う。あたしは胸の中を更に嫌な気持ちでいっぱいにしつつ、彼に付いて行った。こうなったら、もう一緒に行くしかない。
やがて、背後に少し削られた崖のようなものが控えた、小屋が見え始めた。きっと、その小屋がたこの神の住み家なのだろう。小屋の前まで来ると、新田くんは呼び鈴を鳴らした。しばらく後に、扉が開く。
「あなた、誰？」
そこに姿を現したのは、三十代くらいの年齢の女の人で、寝ぼけたような顔をしていた。とてもじゃないが、神と名乗るような人には思えない。何処にでもいそうな、おばさんだ。ただ服だけは、真っ白なワンピースで、宗教的雰囲気を漂わせていたけど。
新田くんはそのおばさんを見るなり、にっこりと笑いこう言った。

「あなたが、たこの神様ですね？　しばらくここにご厄介になろうと思って、やって来ました。
僕は“里神の使い”です」
それを聞くと、そのおばさんは目を白黒させた。まぁ、無理もないだろう。
「なに、あなた？　頭がおかしいの？」
そう言って、あたしの顔と新田くんの顔とを見比べる。あたしは思う。お願いだから、一緒にしないで。そう言われると、新田くんはますます笑顔になってこう続けた。
「いえ、僕は正気ですよ。
里神が、ここのたこ達の所為で困っているのです。それでやって来ました」
「やっぱり、おかしいじゃない」
きつい口調で女の人はそう言ったが、新田くんは笑顔を崩さない。その無理に作ったような笑顔が、あたしには少し不安だった。新田くんは言う。
「そんな事を言って良いのですか？　僕はあなたの秘密を知っているのですよ？　この島の海で、たこの養殖をやっていますよね？
あなたは、それに関与している」
それを聞くと、女の人は驚いた顔をした。青くなる。あたしはその女の人の驚いた顔に驚く。きっと、新田くんはナノネットを通じてそれを知ったのだろう。
「たこ神教の人達は、その事実を知らないのじゃないですか？
良いんですか？　僕がそれを伝えても。
少しの間、僕らをここに泊めてくれるだけで、良いんです。どうか、入れてはもらえませんか？」
そう新田くんが言うと、少しの間の後で、女の人はこう言った。
「……入りなさい」
酷く、憎らしげな表情で。

１１．冷凍保管庫殺人事件２

（特別調査員・二村幸治）

動物行動学の権威で、ノーベル医学生理学賞を受賞したコンラッド・ローレンツとかいう学者は、イカを「人工的な飼育ができない唯一の生物」と言っていたそうだ。ところが、松本元という日本の脳科学者が、ヤリイカの飼育を成功させてしまった。

ヤリイカは、巨大な神経線維を持っていたので、脳科学の研究には必要なものだったからしい。ヤリイカの人工飼育に成功すれば、飛躍的に脳・神経科学の研究が進む事が期待できたって訳だ。その理屈は分からないでもないが、海洋動物学者でも何でもない人間が、それを思い立ってしかも成功させるとは普通は考えない。実際、この成功の影には、多大な苦労があったのだとか。まったく、世の中には凄い人間がいるもんだって俺は思う。

イカの人工飼育の可能性を否定した、コンラッド・ローレンツって学者はそのニュースが信じられず、わざわざ来日して、イカが一週間生存し続ける様を見届けたそうだ。もちろん、その後はその業績を高く評価した。

ま、これはイカに関するエピソードだから、タコにはあまり関係がない、かもしれない。が、養殖というのがいかに難しいものかってのは分かると思う。実際、イカの飼育が可能だと分かっても、それ以降、あまりイカの養殖は進まなかった。経費がかかるからだ。だからこそ、うちの会社のタコ養殖部門の意味は大きい。社の内外から、篤い期待を寄せられているのだ。

そんな訳で、このタコの冷凍保管庫の殺人事件の調査に関する俺へのプレッシャーはかなり大きい。正直、胃をやられそうだ。ただし、だからこそ、協力はそれなりに得られもした。そして、正直、どこからどう手に入れたのかは分からないのだが、今俺の手には、

この殺人事件に関する、警察の調査結果とおぼしき資料があるのだった。違法、あるいは違法スレスレの臭いがプンプンする。ある伝手を頼ったら、持って来てくれたのだが。それは主には殺されていた人間に関する資料だった。

冷凍保管庫で死んでいた人間は三人。その内の一人は、タコ養殖部門の重要な責任者の一人で男、３２歳。こいつの喪失は社にとってもかなり痛いところだ。因みに、こいつは消火器と推測される鈍器で頭を殴打されて死んでいた。

もう一人は、何て事のない従業員でこいつも男。２０歳のアルバイトだ。当日は休憩時間にタコを焼いて食っていたらしい。ＣＡＳ冷凍は保存期間を大幅に伸ばす。それは充分に賞味期限内のタコのはずだ。こっそりちょろまかしたのか、それとも後でちゃんと金を払うつもりだったのかまでは分からないが、どちらにしろ、天罰で殺されるほどの罪とは思えない。こいつも、消火器で頭を殴打されたと考えられる。

最後の一人は、こいつが一番謎なのだが、何故か海の中で溺死していた。こいつも男で、正社員、２９歳。普段は養殖場で、作業を行っているのだが、この日だけは遠出して冷凍保管庫で仕事をしていたらしい。何者かから逃げた結果なのか、単に海に落ちただけなのかは分からなかったが、先の二人を殴打したと見られる消火器はこいつと一緒に海に浮かんでいた。間違いなく、こいつが海に落ちる過程で、消火器も一緒に海に落ちたのだろう。因みに、この男は岩盛島に住所があり、しかも“たこ神教”とかいうよく分からない宗教の信者だそうだ。もちろん、状況の不可解さから、もし仮にナノマシンが関与しているとするのなら、こいつが一番可能性が高くなる。

さて。それだけの事を伝えると、俺と一緒にこの調査を行っている、神原は何故か俺に謝ってきた。

「あなたに謝らなければなりません」

何の事かと思ったら、俺が前に苦し紛れに出した仮説。“ＣＡＳ

冷凍の、保管技術によってナノマシンが死ななかったことが、この事件を引き起こしたのではないか？”という推測が正しい可能性が、どうやら大きくなってきたらしい。それを俺が言った時、神原は重要ではないと言い放ったのだ。

「もっとも、正しかったとしても、一因に過ぎませんが」

自分の仮説が正しかっただろう優越感よりも、何故神原がそんな結論に辿り着いたのかが俺は気になった。そもそも、あれは単なる思い付きで特別な考えがあった訳じゃない。当たったところで、威張れないだろう。それでこう尋ねてみた。

「神原さんの方で、何か分かったのですか？」

何か分かったらこそ、そんな事を言い出したのだろうが。神原は少しも表情を変えずにそれにこう返した。

「色々と分かりましたよ。まず、タコの体内のナノネットは、人の精神を操る能力が低い。知り合いの伝手を頼って、内密に調べてもらいました。実を言うのなら、私は事件を引き起こしたのは海中のタコのナノネットではないかと考えていたのですよ。何か特別な理由があって、タコのナノネットは殺人を犯したのではないか、と。しかし、調査結果を受けて、通常の状況ではそれは起こり得ないと分かりました」

「なるほど。タコのナノネットには、人を操るほどの力がなかった、と。しかし、冷凍保管されいるタコに関してもそれは同じなのではないですか？」

「いえ。同じではありません。冷凍保管庫には、ナノマシンが入ったタコばかりが、膨大に保管されているのでしょう？　数が集まれば、人の精神に干渉する力も強くなる。また、ナノネット除去装置は、ナノマシンとナノマシンのネットワークの破壊はできても、ナノマシン自体は壊せません。そして、ＣＡＳ冷凍技術のお蔭で、冷凍された後でもナノマシンは壊れなかった。この大量のナノマシンに外部からの何かの影響が加われば、充分な力を発揮してもおかしくない」

「ですが、冷凍された状態で人を操るほどの強力な電磁波を出せますかね？」
ナノネットは、電磁波によって人を操る。もちろん、その人が何も体内に取り入れていなければ不可能だが、ナノマシンを保有していたのなら別だ。神原は相変わらずに無表情のまま答える。
「そうですね。それは分からない。ただ、０度以下でも活動しているナノマシンの報告はありますから、有り得ないとも言えない。ま、今からそれを確かめに行くのですが。ナノマシンからの電磁波が検知できたなら、この事件がナノネットによるものという可能性は大きくなります」
そう言って神原は、抱えているバックパックを目で指し示した。恐らくは、その中にはナノネットを感知する機械でも入っているのだろう。因みに、今は車で移動中だ。俺達はＣＡＳ冷凍保管庫に向かっている最中なのだ。
「問題は、それが可能であったとしても、その目的が何であったか、です。それを調査する為には、やはり事件の背後関係を洗わなければならない」
「目的ですか…」
俺は神原の言葉を受けて、少し疑問を感じた。果たして、今回の事件に“目的”があるのかどうか。
「失礼ですが、今回の事件に目的なんかないのではないですか？俺には純粋に事故であったように思えるのですが」
どう返してくるかと思ったが、神原は俺のその疑問をあっさりと認めてしまった。
「そうですね。そうかもしれません。ただ、それでも背後関係は重要です。“目的”と言うと誤解を生みそうなので、別の表現にしますが、不足している“原因”を、私は洗い出したいのです」
「原因？」
「はい。仮に、ナノネットに人間が操られたとしても、殺人には至りません。ナノネットにはナノネットの行動原理があり、何か理

由がなければ、人殺しなどしない。それに私は気になる他の情報も入手していましてね」
気になる情報……　そう言えば、この男は先に“色々と分かった”と言っていたか。俺はハンドルを握る力を少し強めた。この短期間に、よくもそれだけ調べたものだ。
「あなたもご存知の通り、あの島にはたこ神教という、少々変わった新興宗教があります。と言っても、たこを神として祀っている以外は、それほど変わってもいないらしいのですが。ただ、それでも、面白い教義が何点かありましてね。
その一つに、一週間に一度はたこを生で食べなければいけない、というものがある。どうです？　何か思い当たりませんか？」
それを聞いて俺は直ぐに、ナノマシンを体内に取り入れる行為を連想した。
「なるほど。営業成績の資料で、あそこの島のタコの消費量が多い点は分かっていましたが、そんな風習があったのですか」
「風習ではなく、教義ですがね。ま、どちらにしろ、島民の多くが、タコのナノマシンと同じナノマシンを体内に保持しているだろう点は否定できません」
「つまり、そのたこ神教は、ナノネットに操られている可能性が大きいと？」
「いえ、そうは言っていません。何しろ、タコのナノネットは、人を操る力がとても弱いですから。できて、干渉くらいでしょう。気分を操作したり、まぁ、幻覚や幻聴くらいなら可能かもしれませんが」
俺はそれを聞くと、考える。海で溺死した男は、たこ神教に入信していた。この男の死に方が一番、謎だったのだが、体内にナノマシンを大量に保持していたとくれば、納得がいく。
「なるほど。溺死していた男が、ナノマシンに操られて凶行に走った、と。その線が、一番考えられそうですね。で、犯行後に海に落ちるか、または操られるかして死亡」

「そう結論に至るのは、まだ早い気もしますが、概ねはそんなところだと思います。しかし、それでも腑に落ちない点がある。操られたからと言って、それで殺人に至るとは考え難いのですよ。先にも言いましたが、ナノネットの行動原理を知る必要があります。そして、またたこ神教の話題を出しますが、この宗教にはまだ変わった教義がある。なんと、“子供を産み育ててはいけない”というのです。しかも、その理由は、人類は地球環境に悪影響を与える悪い種だから。なんだか宗教と言うよりは、狂信的なエコロジストのようですが」

「はぁ……」

俺はそれを聞いて、そんな気のない返事をした。正直、俺にはそんなに重要な話には思えなかったからだ。それで、こう訊く。

「でも、島で殺人事件が起きたりだとか、そういった事は起こっていないのでしょう？　今回の事件には関係ないのじゃないですか？」

「直接的には関係ないかもしれません。しかし、捨ておけない理由はまだありましてね。この宗教にこの教義が生まれたのは、そんなに昔の事ではないらしいのです。何でも、“神の代替り”が行われたそのタイミングからなのだとか。これが何を意味するのか、その詳細は分かりませんが、その時期は、元タコ養殖ベンチャー企業の若者達が、タコの安価な養殖に成功した時期とも一致している。まだある。この“神の代替り”以降、徐々に近隣の海での、タコの怪異に関する噂話が増えているのです。気になりませんか？　偶然とは思えない」

俺はそれを聞いて少し驚いた。何で、こんな短期間にそれだけ調べられたのだろう？　そう質問すると、

「いやいやいや。実は幸運にも、知り合いがこの“たこ神教”を調べていましてね、教えてもらったのですよ」

と、そう返してきた。“幸運”ね。それを聞いて俺は疑う。本当にただの幸運なのだろうか？　が、深くは言及しない。その意味も

ない。この男の事だから、何かをやったのかもしれないが、俺には関係ない。
「なるほど。確かに奇妙な話ですね。偶然とは思えない」
俺はそう答えながらも、それほどその話には関心がなかった。今回の俺の調査には、重要ではないと思ったからだ。別に俺は真相究明をしている推理小説の中に出てくる探偵ではないのだ。事故の原因とその再発を防ぐ方法さえ分かればいい。ナノマシンがまだタコの体内で生きていて、それが悪さをしているというのなら、ナノマシンを殺す為の何らかの処理を、これからするようにすれば良いだけだ。それが難しいのなら、電磁波の遮断でも何でもいい。
正直に言うのなら、こんな面倒臭い事からはさっさと抜け出したかったのだ。神原は、俺のそんな心中を知ってか知らずか、気分良さそうにしていた。

ＣＡＳ冷凍保管庫に着くと、神原は早速、バックパックに入った機器を取り出した。恐らくは、ナノネットを検知する為のものだろう。バックパックを背負い、嬉しそうに機器を握るその姿は、中年男には似合わない。カウンセラーにも見えなかった。
神原は、ＣＡＳ冷凍保管庫の中に入ると、その光景に子供のように興奮していた。
「なるほど。面白い光景ですね。凍らされたこれだけの数のタコを見る機会など、滅多にない」
どうにも演技ではなく、本当に喜んでいるようだった。変な男だ。そのうちに、保管庫の責任者に向け、こんな事を訊いてきた。
「どのタコが、一番新しいものか分かりますか？」
その質問を受けると、保管庫の責任者は、
「今の時期だと、ここが最新で、右にずれていくほど古くなります。端まで着くと、反対側に移って、それで最新の手前までが一番古いものですね。ただ、古いと言っても、１年前までが最古です。みな、売れてしまうので」

と、そう説明した。その説明を受けると、神原は最新のタコの辺りで、機械のスイッチを押すと、徐々に古いタコの方に移動させていく。端まで着くと、スイッチを切り、反対側に移動してまたスイッチを押して歩く。どうやら、最新のものから順に古いものの方へ、ナノネットの検知を行っているらしい。

それが終わると、外に出て、バックパックの中から小さなサイズのノートパソコンを取り出し、神原はその機械を繋ぐ。何かのソフトを起動させると、パソコン画面に、ジグザグに右下がりなグラフが現れた。

「ははは。素晴らしい」

その画面を見ると、神原はそう呟く。

「見てください、二村さん。最新のものが一番元気で、徐々に活動が下がっていくのが分かる。ただ、一年経ってもまだ活動してはいるみたいです。なるほど、ＣＡＳ冷凍保管技術は素晴らしいですね。これなら、充分に原因になり得ます」

つまりは、ナノネットの反応があったという事だろう。古くなると活動は弱まっていくが、冷凍保管された状態でも、ナノマシンは活動していたのだ。俺はそれを聞いて、安心した。これでこの事件から解放されると思ったからだ。ナノマシンを殺す設備を、この保管庫に設置すれば良いのだ。それが不可能なら、ナノネットの電磁波を妨害すればいい。いずれにしろ、解決手段は存在する。しかし、そう言うと神原は反論した。

「まだ、甘いと私は思いますよ。それだけでは不十分です」

「何故です？」

早く解放されたい俺はそう問いかける。神原はそんな俺の様子を少し笑った。

「早く逃げ出したい気持ちは分かりますが、ここは慎重になった方がいい。もし、再び事件が起こったら、あなたの所為にされますよ」

そして、そんな事を言う。俺はその言葉に固まった。確かに、そ

うだが。神原は更に続けた。
「二村さん。あなたは、優秀な人だが、少しばかり面倒臭がりな所がある。直さなければいけないと思いますよ。
何度か言っていますが、ナノマシンはただそれだけでは人を操ったりしないし、操ったとしても殺人はしない。殺人を犯したからには、何らかの原因があるはずなのです。それに、ここのナノマシン達は連携してはいない。つまり、ナノマシン・ネットワークにはなっていないのです。恐らく、定期的にナノネットを破壊する処理が行われているのだと思われますが。しかし、だとするのなら、外部から何らかの存在が、ここのナノマシンを利用して殺人を犯した事になる。それを野放しにすれば、今回のような事がまた起こるかもしれない」
その後で、神原は海の向こうを見据えた。その先には、確か岩盛島があったはずだ。
「最近になって、岩盛島で行方不明者が発見されたそうですよ」
「それが何か？」
「いえいえいえ。どうにも、面白そうな展開だと思いましてね。どうでしょう？　ここは一つ、あの島に乗り込んではみませんか？」
俺はそれを聞くと、うんざりとした気分になる。神原は、妙に楽しそうだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7165w/

?神的神式

2011年12月1日00時56分発行